釋雲照講述

十善戒和讃略解

佛教婦人會

016265-000-6

特18-604

十善戒和讃略解

雲照／著

M25. 10

ABD-0146

特18
604

十善戒和讃

一名三世の友誌

一句　歸命頂禮十善戒

三十二種の妙相も

十方三世の諸如來の

淨戒を種因とす

二句　戒定智慧も三密も

十七の道品も

皆生じたる功德なり

三句　身口四意三よりも

世間諸善の根本にて

人の人たる道なれば

四句　國家其家も持つべし

貴賤老少奉ぜべし

龍樹菩薩の教誡に

佛果を期して戒なきは

五句　波の沼のなき如く

到るを得じと。の給へり

左右に行く道に

渴きに遇り水を得て

六句　不昔殺蟲の命をあはれみて

死して道果を得んけり

又八歳の小沙彌の

水の流れて穴に

入るを救ひし功德にて

七句　不盜又毘舍伽母の指の環の
　　　　　　元の指端に還りたる

八句　不婬影勝王の象の子の
　　　牧牛の女の操もて

九句　不妄班足王の猛惡も
　　　九十九王の命をも

十句　不綺言辭舌明了に
　　　時候和順に資産富み

十一句　不惡人天中に香はしき
　　　妻子眷屬和悅して

十二句　不兩君臣和穆違はぬは

天死轉して長壽せり
落て入江に沈みしも
ためしは實にいなまれぞ
產に臨みて惱みしを
誓ひて分娩せしめたり
實語の德に感悟して
放ちて道に入にけり
生れし種は不綺語なり
草木さへ皆色ぞ增ず
ものは善語に過るなし
上下人心皆服ず
不兩舌語の功德なり

親好厚く和敬せは

十三句　不貪足ことを知る人の身は
　　己をせめて施せよ

十四句　不瞋世を亂し身を亡すも
　　一切男女は過去の父母

十五句　不邪八正の道廣けれど
　　己が顏貌智惠伎倆

十六句　結識神も聖も御佛も
　　これは眞實の道なれば

十七句　妻子珍寶。及王位
　　唯此戒の功德のみ

十八句　百歩の間だ持つすら
　　是ぞ菩薩の意なる
　　居ところ直に華臺なり
　　多欲は餓鬼の種因なり
　　皆一朝のいかりなり
　　一子の慈悲を運ぶべし
　　邪見の人そ踏み迷ふ
　　皆善惡の影ぞかし
　　みな此道に由り給ふ
　　此道撥無するなかれ
　　死出の旅路の伴ならぞ
　　身に添三世の友ぞかし
　　佛になると。の給へば

萬行中の易行なり

唯ひたすらに守るべし

十善戒和讃畧解目錄

○一 十善戒和讃本文　一頁
○二 十善法話兼序　十六頁
○三 十善戒和讃畧解　十九頁
　①十善を行じて四恩を報答すべき事
　②十善は一切道徳の元素にして十善
　　宗教の外に別に道徳なき事
　③世界創世即ち世間の十善　二十八頁
　④世間の十善　三十八頁
　　聲聞の十善　菩薩の十善
　　佛乘の十善
　　緣覺の十善
　　秘密佛乘の十善
　　三句　仝　四十三頁
　　四句　仝　四十五頁
　　五句　仝　四十八頁
　　六句　仝　五十一頁

五句　不殺生　五十四頁
六句　仝　六十三頁
七句　不偸盜　六十八頁
八句　不邪婬　七十四頁
九句　不妄語　七十七頁
十句　不綺語　八十三頁
十一句　不惡口　九十頁
十二句　不両舌　九十八頁
十三句　不慳貪　百九頁
十四句　不瞋恚　百十九頁
十五句　不邪見　百廿七頁
十六句　結讃　百三十八頁
十七句　仝　百三十九頁
十八句　仝　百四十二頁

十善戒和讃略解目錄終

十善法話

雲照律師説　侍者某記

十善戒和讃略解の序として今茲に掲げるは明治廿三年十一月十九日三浦中將の邸宅に於て十善會を開き戒師雲照和上法話せらるゝを、侍者某筆記せし十善大意にして至て言葉を和らめ分り易ければこゝに掲けて略解の序となし中に往々解しにくきと思ふ所々は割註して聊か初心の人々の爲に手引とす、幾度も讀かへして十善の德を讃美し奉行せば各々今日其の家内に於て現在利益あるべきを疑ひあるべからず以て誠す

會主三浦曰く今日は熟れも初心の信者なれば慾して佛

教初入の大意を陳説あらんことを乞ふ

夫れ十善は人たるの道よりして。一切万善の根本。道德の標準（標準とは道德を行ふ者の手本）なり故に苟も人たる者乃道德乃標準なるあらは世界到る處として修めざる可からざるの善道よりして富貴の者益修むへく。貧賤の者愈行はざる可らざるの要道なり蓋し此十善は天然の性德よりして。天地眞理の顯るゝ所なれし。強ちに佛教の十善と云ふことにはあらず。苟も人と生れて人たらん以上は此十善に依らずんはあらず。君に事へて誠忠を竭さん者。父母に事へて至孝を致さん者。官吏と爲て百姓を治導する者。教師と爲て子弟を教育する者。上は皇帝陛下を始め奉り。下は樵夫漁人に至るまで。均しく行はざる可らざるものは唯此十善なるのみ。故に此十善を外よして而も忠而も孝たらんと欲することは。決して得べからざるなり。予嘗て西京より當地に登る時。船中に津田某なる者あり。予に告て曰く。小生幼少より西洋に遊び彼に留まること數年。故に外國の語學等に於て稍や通ずるところあるも。我邦の事情を知らず彼地に在るとき彼地の朋友小生に問ふ。日本宗教の教義は云何と。小生報然（方角が知れぬこと）として答ふる能はず。今佛教を學ばんと欲せば何宗に依らば佛教の大意の何物たるを知るを得べきやと。予答て曰ん。されば即今の諸宗の中假令何宗を學ぶとも佛教の大体を知り得ることを能はざるなし。何んとなれば譬へば喬に樹木あり。東方の枝を枝葉悉く東方に向ひて西に向はず。西方の枝は枝葉悉く西方に向ひて東方に向はず。南北の枝葉亦皆爾なり。若し人有

て其枝葉に就て其樹木の方向を問へば東方の枝は即ち云はん。此木は東方に向ひて西に向へすと。西方枝は乃ち云はん此木は西方に向ひて東に向はすと。南北乃枝亦かく云へん。終日之を尋ぬるも遂に樹木の方向を知る能はざるべし然るに若し其枝葉を捨てゝ。其根幹に就て之を求むるときは樹心の卓立して沖空に見ん。而して亦東に出る枝もあらん。或は南北に出る枝もあらん。西に向ふ枝もあらん。或は東南西北相錯誤若し根本を捨てゝ四方たがひにあやまつて其全躰をしらん枝を求めはいつまでも一方より求むる能はず其もとより中をもとめば終に四方を見る向ふを知ることと能はざるべし。今亦爾り若し佛教の根本を知らざ

る時は假令八宗九宗を研究するも亦遂に佛教の大體を識るを得からず。何となれば甲宗は念佛にあらざれば成佛する能はず。題目を唱ふるならば雑修雑行となりて往生するを得ずと。乙宗は乃ちいふ題目にあらざれば成佛する能はず念佛すれば稱題（だいもくをとなふる事）の功德を消すべしと。丙宗は乃ち云ふ稱名題目等は皆是れ顯教の所談にして一生成佛の法にあらず。ひたすらに眞言を唱へよと或は又稱名稱題眞言並に皆非なり。直指人心見性成佛はそれ眞實なれば唯默りて坐せよと甲の是する所は乙之を非し乙の正とする所は丙之を邪とす。終日八宗を探り終夜九宗を叩くとも遂に佛教の何物たるを知る能はざる而已ならず。益疑惑を生ぜて寧ろ學ばざるに加あざるの有樣に至ら

ん（なほうたがいれつて却て）（よなばん力のまゝとの事）然らば則ち如何せば果して可ならん平（なれもどうしはたらよからう）曰く、唯其根本を索むるゝ在るのみ苦し其根本の旨を領せば枝葉自ら明かならんか（ものゝ本を知れば、ものゝ末はのづから明るる）天台を學ぶも善し天合よして佛教の眞面目を知り得べし。乃至禪淨土を學ぶも善し禪淨土にして佛教の眞面目を知り得べ（ものゝ宗にみ）（佛教のまことを知れる）而も甲の言ふ所乙の言ふ所。各其旨を領して相妨げざるのみならず。甲を全うして即ち佛教。乙を全うして即ち佛教なるを猶ほ彼の東方の枝を全うし。西方の枝を全うし。等しく一樹木なるが如し。是れ他なし佛教乃根本佛教の大躰を領得するよりの其根本其大躰とは何か曰く十善十惡因果應報の眞理是なり眞理（これこそ釋尊三大僧祇の修行も此の眞理を研究し得んが爲のみ（もこの眞理を求めたいばかりなり）五十余年の

（やかによらい、長い御一ゆざやう）

說法八万四千の法門も。此の眞理を布演し擴張するの外なら（ず此の天地間百事万般苦樂窮達各其の差別あるの所以。廣く十界より亘りて種々差別せる所以を推究せんと欲して此の眞理に照さざる時は。到底知り得可らず（すべて何ひとも同ものもこの眞理によらざれば知ることなし）

○蓋し原因結果なる語は今日世間至る所之を談ぜざるはなし然れども世人の云ふ處は唯眼前の原因結果をのみ談して。未だ過去未來に及ぼさずして唯吾人眼見の一世の事に止る。然れども現見の一世のみにても現に原因と結果と符合せざるが如き事あり（今は何れも原因結果といふことを云へども目くんだのまへのみ知て、まへの世さきの世と知らぬ換言すれば）ことばをかへ豆實を蒔て麥を獲ざるが如き奇觀ある者の如し何となれば現世終身勉强し汗を流し困苦して而も終身食喉を潤さず衣肩を蔽はざる者あり又日夜

學業を勵み辛苦人より倍して。而も其の結果。中人に及ばざるものあり。或は緩慢よして而も博識なる者あり。遊惰にして而も終身衣食餘りありて。困苦を感ぜざる者あり。是等の事情は世間現に尠しと爲さることならずや。是れ則ち原因と結果と相反するもあるが如し。これらは因果の理に違ふに似たり若し世間實に勉強の悉く學者となり遊惰の者悉く困窮せば。則ち世人の謂ゆる眼見一世の上の原因結果にして事足るべしと雖ども天下の事決して爾らざるは。皆人の知る所なり。又然れども天下の事決して爾らざるは。皆人の知る所なり。又縱令勉強して博學者となりたるの原因は何物より來れるやと問はゞ。人答ふ能わざるべし何となれば若し父母資本を給し身体健康にして能く勉強すると。又己が天稟魯鈍ならず。精神活潑にして能く勉強すると。其の結果。中人に及ばざるものあり。或は緩慢にして而も博識なる者あり。遊惰にして而も終身衣食餘りありて。困苦を感ぜざる者あり。是等の事情は世間現に尠しと爲さることならずや。是れ則ち原因と結果と相反するもあるが如し。やうに思はるゝに似たり若し世間實に勉強の悉く學者となり遊惰の者悉く困窮せば。則ち世人の謂ゆる眼見一世の上の原因結果にして事足るべしと雖ども天下の事決して爾らざるは。皆人の知る所なり。又縱令勉強して博學者となりたるの原因は何物より來れるやと問はゞ。人答ふ能わざるべし何となれば若し父母資本を給し身体健康にして能く勉強すると。又己が天稟魯鈍ならず。精神活潑にして能く勉強すると。其の結果。中人に及ばざるものあり。或は緩慢にして而も博識なる者あり。遊惰にして而も終身衣食餘りありて。困苦を感ぜざる者あり。是等の事情は世間現に尠しと爲さることならずや。是れ則ち原因と結果と相反するもあるが如し。

るおとを得るは。其精神及び幸福等は何の原因より由りて來りしやと。其由て來る所を尋ぬる時は必ず何の原因を以て此の精神を受け得たるや。遂に五里霧中より忙然たらん。（因果はわかるが目れまへに見へぬ理れわかるまい）是れ吾人淺劣の智惠を以て唯眼見一世の外過去未來ある事を知らざるの狹億より出でたる妄計にして斷常二見の分域中に彷徨すればなり（これ外道ふこつる）此より於て我が佛世尊此迷者を憐んで大賢の悟を開き我等の爲に轉迷開悟の妙法を顯說し玉ふ。此の生死冥暗中ふ於て燎然として火を觀るが如きものは唯此の三世因果善惡應報の眞理あるのみ（されば佛は自からさとりて又よひれを れをさとし（まへれ世さきれ世と知らずこれ世ばかりと思ひつめる者は斷見常見）れをつたへ三世因果れ眞理を說てと〜へ玉ふ）若し今此の三世因果の理より由て。世間を照見するときは。其の勉強して而も貧困を招くが如き看あるは是れ勉強の原因より由

で貧困の結果を來たせしまはあらず。蓋し是れ過去世より於て人をして困苦せしめし原因の今日に結果を顯はして貧困を受る者なり三世因果はてらして見れば此れ世と目れまへいはふあらへれて知る事とならぬ理い直よしれる謂ゆる貧困の原因とは財を貧りて旋さず還て他人の財を掠め他を苦しめる の所業。今日より結果して。己身の困苦となるなり。又われに反して生れながら聰明利智よりて。活潑なるは是れ前生より曾て學を勉め智を研き德を積み慈善を勉めたるの結果の今日より現顯發達し來りて慈悲具足せる父母の保愛となり來りて其の完全の敎育を受けて已が性來の智力をして益增進發達せしめたるなり。われに因りて見れば假令勉强して今世より終より好結果を見るとなきも。其の勉强の功。決して空しきにはあらず。現世に其果を得ざるものは未來より於て

必ず其結果を得べきなり。又之より反して遊隨の者の還て終身困苦を減ぜざるが如きは。遊惰の原因を以て安樂を得たるよはあらず。其の安樂を得るの原因も。過去世より於て他人に慈善を施し人をして安樂せしめたる原因が。今日より結果として來りて終身困苦を感ぜざるなり。然れども又今日遊惰にして善事を勤めざれば必ず未來の困苦たることを決して疑ふべからざるは眞理の當然なり。故に遊惰よりして現に困苦を感ぜざるを見て自から奢り。自ら勤めざる時は未來より必ず甚しき劇苦を感じて安樂の日なかるべし。是の如く廣く三世より亘て原因結果を談ずる時は一事一物として疑ふべきものあらねば。善因善果惡因惡果の天則燎然として亦判斷より苦しむ所なし。よく心をして因果ことを考へて見れば何とかふ因果ことみとなる 是即ち大聖世尊が三

大無數却の修行より由て眞如法性の深理を開見して至らざる所なきの智眼德用を以て達觀し玉ふ所なればり。（眞理ハ佛ケ長き間だーゆぎやうーてこれ眞理と見ひらき智慧と光りと以てうかがひ智る因緣也）故に眞正に道德に志す者は深く此の意を得て篤く因果を信じ勉て十善を奉行し。亦能く人を云て善惡因果の眞理を信じ。十善を奉行せしむべきなり（ば德とよろこぶ者ハ此と因果と也理と信じて早く十善をきこえれ）若し斯の如くあるときは。天下眞正の道德より販して適くとして行れざる所なからん。是眞正の道德にして眞に人の人たる道と云ふべし。若し之に反する者は滔々たる天下身を容るゝに處なきに至らん。豈勉めさるべけんや

予嘗て越後の國に在りし時。壁上大字の軸を係くるを見る是れ五歲の小兒が書せし所。其運筆乃妙なる。其筆勢の力あ

る實に大人書家の及ばざる所。驚くに堪たり。五歲と云へども僅滿三年の小兒にして。其の運筆を倣ふや亦僅々一年ばかりに過ぎざるべし。而して其の書大人數年の尅苦も及ばざる。是れ予が現見せし所なり。世人の謂ゆる原因結果を以て論ぜば是事何んか判し得んや。今我應報乃眞理を以て照す時は强ちに怪しむ可きに非ず。其の生れ勿らに善くする者は謂ゆる前生に於て曾て書藝を勉めたる原因が報ひ來て今日の身に顯れたるあり。此乃理に因て之を視るに今我四千万の人民其苦樂窮達賢愚才不才名々四千万種に差別せるものは。其原因に各殊別あればなり。一切天下の事一事一物として同一樣に毫殊なきものは是れなきは。是この原因の作業同一樣なるもの無ければ。其の結果た

る事物各々相異なるなり。然るに彼外殼の一切万物を以て一神乃所造となすが如き大に此の眞理に違反し奇觀を呈するものと云ふべし。今喩を以て之を示さんか。爰に一の金米糖を製するものあらんか一の銅鍋乃中に一時製する所のものは百千万粒と雖も皆な同質同形にして其れ甘味亦同般なり決して大小長短あるなし。其の百千万粒が是の如く同一樣なるものゝ他なし。其の原因たる即ち製造人も器械も砂糖等の資質も。皆な同一の物を以て製すればなり。是れ百千万粒の原因が皆同一樣なる故百千万粒の結果に至ても亦同質同形同一樣にして更に大小長短の不同なきは固より原因結果の天則にして疑ふべきに非ず。こんぺいとうもたとへば如く因果乃理へしかも同じたねなれば果も同じ然るに彼の天主は何を以て同一の神の同一

の人種。同一の天地空氣世界を以て製造しながら。同一の人間を造ることゝ能はずして千万無量に差別せるや。今一歩を譲て同一の日本人に於ても同一の人種なれば。まさか其の身の長け一丈六尺なると。但五六尺なるとの大差なければ可なりとするも。如何せん其の心相性質に至ても。雲泥も啻ならず身へ入となればあまりに替りあるけれども心へ大きかれるなり或は其の心の甚だ甘きものあり。甚だ辛きものあり。甚だ苦きものあり。甚だ澁きものあり又鹹きものあり薬となるものあり。毒質を含むものあり。甚しきに至ては日本人種よりして。日本人種にあらざるが如きものあり。故に是乃如く差違せるや。彼の一器内に一時に製する所の金米糖が。或は辛きあり。苦きあり。或は毒氣を含むものあらば甚だ奇觀ならずや。物理に適はせざるふと是の如し。然

るよ今き此の應報の眞理原因結果の天則を以て之を照すときは洵に晴天よ大陽を望むと同一般ならんのみ

是の如く深く應報の眞理を曉らむるときは設令人有て十善は行ふべからずと言ふとも行はざる可らず十惡は勉めて作すべしと言ふとも作す能はざるに至るべし然れ則ち設へ善は一毫たりとも喜び勇で勤むべく惡は一微たりとも恐懼れて避げざるべからず斯く領得せん時は此應報の眞理程愉快よ喜ばるきものは無かるべし

されとこう父母親戚は勿論之を一郡一國に及ぼし乃ち天下万姓をして此の眞理よ安住せしめんことを勉むる是れ即ち大士の自利々他の善行一大事因緣とする菩い行は大事乃因緣である

十善を行して四恩を報答すべき事

吾人今日よありて支體完具し健康幸福無恙安穩にして是乃如くの才智を有し是の如くの功業を作すも決して我れ一人乃致せし所にあらず父母我を産み我を育つるは是れ父母の恩なり衣を被穀を食ひ書を讀み筆を弄し眼に見手よ觸るもの悉くみな世界の人民の勞働より成立つるものよして是れ一切衆生の恩なり「國王上よ在て國家を鎮定し我等を撫育するは是れ國王の恩なり」加之ならず過去以來無量却の間吾と一切衆生と共よ三界に輪廻して父母となり兄弟となり主君朋友となり生々世々互に關係あることは無量無邊なり されば一切の男子は是れ我父一切の女人は是れ我母なり 皆之を殺し之を奪ひ邪婬し妄語し綺語し惡口し兩舌し慳貪し瞋恚し邪見するを得べけんや 更よ進ん

で論ずれば今此天地万象は皆眞如無自性よして。同一實相同一緣起の法なれば。己身の外よ佛もなく。佛の外に衆生もなく。衆生の外に自心も無く。心佛衆生は。本來平等よして。無二無別なり。何ぞ此無二の中よ於て我他彼此の隔念を生じて自性を損害すべけんや。是の如くの妙觀に住して十善を行ふは。則ち眞正の道德よして眞に四恩を報ずるものと云ふべし。是を印度に在りては菩薩と名け。支那に在ては聖人と名け。日本に在ては明神と名く。是の如くの眞理を開顯して一切衆生を愛隣し濟度するは即ち佛敎の敎理行門よして是即三寶の恩なり。如是の心念に安住して以て四恩乃鴻德に酬ひ以て國家の深恩よ報ずる是を佛敎の眞の報恩と。

十善四恩ハ一切道德の元素にして十善宗敎の外に別よ道德なき事

十善因果應報に憑る所の道德ハ道德即ち十善。十善即ち道德よして應報の眞理人の行いよ顯れて十善となるものなれば十善即ち道德。道德即ち十善よして十善の外に道德なく。道德の外に十善なく。又この因果の眞理を離れて佛敎なければ佛敎直ら道德。道德直ら佛敎よして。吾佛敎の眞理より之を言ハゞ道德の外に更に宗敎なく。宗敎の外よ更よ道德なしとす。何となれば佛敎なるものは天然の眞理に範りて衆生緣の慈悲と法緣の慈悲と無緣の慈悲とを發起して天下の蒼生と及び普く十界の情識あるものを隣愛し其れを利益し安樂せしむるの事業を勉勵進修するを以て菩薩

大士の本業とす又諸佛出世本懷の一大事とするの外更よ一毫の他事あるなく凡り菩薩の初發心及び諸佛成道の目的願望とては此外にて決してされなきなり。世人眞實に君父の四恩を報答せんと欲せば此の十善を離れて決して眞個に四恩を報答するの道なかるべし。何となれば世俗通常の忠孝い即ち十善道德の一分支にして道德い即ち道德なりと雖も未だ充分に道德の根源を窮め淵底を盡さて忠孝乃道を全ふする能ざるなし。其い只人情常識を本として其志を盡すものよして未だ確定不改の眞理よ則りたるものよあらざれば其の常識よ訴て君父の爲め無上乃善事なりとして快く行ひし事も後ちよ退てこれを顧みれば却て眞實乃利益安樂とならざること多々あるべし今若し此

の十善因果の理に則りて忠孝を竭すときは。縱令眼前よ於て君父乃意を充分愉快ならしめざるも。久しふして必ず大孝たるを發顯するふとあるべし。況んや君父の爲よ惡みを報ひ殺を行ひ瞋を起す等は現よ君父の爲に惡を行ひ以て忠孝なりと認むる如きは。顚倒の甚きものよして決して忠孝にあらざるなり。何となれば惡を作して善果を得と云ふふとは。源因結果の眞理よ於て決してされあるべからざるの定則なればなり。仍て大孝大忠を作さんと欲するものは須らく。因果應報の元理に則りて。惡よ酬るに德を以てし。君父をして眞よ天下に怨讎なからしむべし。是を眞の大孝大忠とす況や熟ら顧みるに已れ父母の恩を稟るの年久しと雖も其思を報ずる年恐らくは幾許もなかるべし。何んぞ此

の少年月の孝を以て彼の多年月の恩を報答し盡すを得べけんや若し佛教十善の眞理に基きて至孝を作す者は但父母に顯世の快樂を與ふるのみならず生々世々に互に相愛し相歎て自ら十善道德の至孝を行じ。又能く父母をして親から十善因果の眞理を信ぜしむるときは。己れ强ちに勸諫せざる父母進んで善根を增修し引て一切衆生に及ぼすべし若し如是あるならハ至孝も亦大ならずや

されば眞實の道德眞實の忠孝は此十善を離れて外に求むるも決して得べからず。此大孝至德を以て君父に報ずるを佛教の眞面目一切道德の本體とす世間有德の君子宜しく深く此の旨を領會せられよ終に臨んで一言せん若し能く此の原因結果應報の眞理を了するものハ慈善道德を爲さ

んも人に誇るべからす。世間或ハ我れ是の如くの慈善をなせり。我れ個樣乃道德をあせしと。自ら吹聽して人の信用敬服を求むるものあらん乎是れ眞正道德を勸むる者の最も愼しむべき所なり此の如くするときハ善は則ち善なりと雖も其結果甚賤劣として阿修羅界の福報を現生すと云へり。故に善は勉めて秘すべし。是を陰德といふ。惡は勉て露はすべし。是を發露懺悔と云ふ。譬へ彼の筍を培育する如し。塵芥肥料等を以て。力めて其根帶を覆ふ時は其質輭かに其味甘くして且つ肥大なり。之に反して肥料を與へず其根を露ハす時ハ其質太だ堅硬に其味惡しゝ善惡を行ずる者も亦復之に類す。善を爲して勉て隱覆する者ハ。其福愈廣大なり勉て之を發表する者ハ其功德愈よ鮮少なりとす。之に反し

て悪を作して勉めて之を覆ふものゝ其悪業力愈増長の發露懺悔するものは其業極めて衰弱すべし是れ亦自然の理の然らしむる所なり是を以て之を觀れば善悪應報原因結果乃天則ゝ一定不反よして決して毫異あるべからざるものなり況や復一旦蒔き置きし原因か其果報を結せずと云ふは是亦決して無きことなり故よ律の偈に曰く

假今經二百却一ヲ　所作ノ業不レ亡ヒ　因縁會遇ノ時　果報還テ自ラ受ク

律藏の中文々章段の結末に此偈を掲げて之を誡め玉へり故に予も亦常よ此の偈を引て應報の理を辨述す假令百却と云ふ久しき年月を經るも一旦作し畢りし所の善悪の業力ゝ決して癈亡し枯竭せず因縁熟する時よ當てゝ其の善悪乃果報を出生して他人之を受くべきよあらず必ず自身に之を受て悪ゝ必ず樂報を感し善ゝ必ず樂報を招くなり決して他に神明佛陀等有て之か苦樂窮達を附與するよはあらず自ら悪を造て自ら悪の果を受け自ら善を修めて自ら善の結果を受くること猶鏡に對して影を現じ谷に呼て響應ずるの如し仮令大地はうちはづすよと有んも此の應報の眞理は古今に通じ万々に亘りて決して毫微乃相違あるとなきあり故よ勉ても愈〻勉むべきは唯十善道德なり頼みても猶頼むべきは自應報眞理なり假令富四海を保ち妻子珍寶意乃如くならんも無常の暴風忽ちに來りて一息絶ぬる時ゝ一物とゝて其神魂に添ひ隨ふものなし上は万乗の君より下は橋上の乞食に至るまで死して去て神魂冥途に趣くときは更に異樣あるなし唯冥々として獨り彷徨して

黄泉に入るのみ。嗚呼實に頼みなきものは世間名利の業なり。然るに今世後世能く我が伴侶と爲て我を導て涅槃安樂の境遇に至らしむるものは唯此十善道德の功德あるのみ此に至て之を思へば歡喜の涙を拭ふて信受奉行せんこと貧人乃寶を得るか如く渡りに舟を得るか如くの心地して此の十善の爲には設ひ身命を殞すことあらんも決して退屈退歩すべからざると誓心決定して。自ら勉め他をして勵ましすべきなり。蓋し我が肉身は猶ほ彼の旅館の如し決して惜しむべきものにあらず。今日務めて善業の道糧を貯るまとめれば命終の時に臨んで下等の旅館を出てし明日上等の旅館に移り宿るが如し善業の道德ある時は此四苦八苦を以て充滿せる不淨の肉身を轉じて無漏勝妙の法性身を得て不老不死ならん。世人只旅館を惜むことを識て。旅費を貯ふることを勸めざるは愚蒙の至りと云ふべし。請ふ世人よ旅館を惜む勿れ。旅館は道途に散在せり。勉めて道糧の金貨を貯ふることを爲せ道糧の金貨とは乃ち此の十善道德是なり。況んや世間の金貨を時に隨ひ國に隨て通用せざるまとあるのみならず。還て朽損するまとあり。今此十善道德の金貨は。天地開闢の時も。末來永却の後も。日本も支那も歐米も東方阿閦如來の世界に於ても。西方阿彌陀如來の世界に於ても。十方法界至る所の。處として三世三際を盡して通用せざる時處あるまとなし。假令百千万却を經歷するも決して朽敗するなく。益光輝を放て自身を益し一切衆生を利して應用無窮なり。豈貴ばざるべけんや。勉めざるべけんや

十善とは世間出世間世間とハ生死乃苦惱ある世界なる出世界外おりの。一切善法の惣稱にして。出家在家を問はず。貴賤尊卑を撰ばず乃至邦國の文明と野蠻とを論せず。一切道德慈善の根礎なり。其中世間の十善とハ太古創世大むかし世乃始まりしときの時よハ。人皆な質直なり其後ち惡法を行ずる者有るに至る。時に聖王世に出て十善戒を說て。人民悉統治し玉ふ。是れ即ち道德の本源として。一切倫理人乃行ひ守る處の道法律の元素悉きてのハじめなり。今世尊の佛眼宿命通を以て明に三世を照見し。詳かに宿生を記臆して說き玉ふ所に依るに太古此世界。初めて成じたる時。其の大地は。一の海水。風の爲に皷激せられて。和合して始て地となれり。猶熟乳の既に冷已れば凝結を生ずるが如く。其の海水の上分凝結して地となるも亦爾なり。其の上に自然に地味あり。色香美味。悉く皆具足せり。此世界成じ已て。一類の上界の有情。壽命盡て上界より沒して此の世界に來生ず。諸根具足して身に光耀あり。空に乘じて往來す。喜樂を以て食とし。長壽にして住す時に此世界日月星辰。晝夜時節あることなく。亦能く男女貴賤を辨ずることなし。此時衆中に一人あり。眞性嗜欲にして忽ち指端を以て彼の地味を嘗て。心に愛著を生ず。餘人此を見て。相學びて此を食す。此に由て。身漸く堅重にして。光明隱沒し悉く皆幽暗なり。此食量調はざるが故に形色損減す。色減ずるに由るが故に互に相告て曰く。我形は光悅あり汝が形は損減なりと。彼光悅なる者。形色を恃むが故に。遂に憍慢を生じ不善根を起す。不善に由るが故に。地味遂に減ず。是時

諸人。共に相集りて。互に怨歎を生じ悲啼愁惱す

次に又有情の業力に由て自然に地餅を生ず。色香美味。悉く皆具足。金色の花の如く新熟の密の如し。此地餅を食して長壽にして住す。若し少しく食する者は。光明あり。由て相輕んじ。憍慢することと前の如し。乃至地餅皆沒す。時に諸人共に集りて恐惱して相視て曰く。苦哉苦哉。我昔聞て。是の如きの惡事に逢はずと。然るに有情の福力に由るが故に。更に林藤(桃の色りつぱで香よく一て味あまきなり)の生ずることあり。色香味具するものなし。此の林藤を食して長壽にして住す。若し少き食するものは身に光明あり。由て憍慢する(大食の者光明減ずるをば光明あるとの却て慢すること前に說が如し)。乃至終に林藤沒するが故に。諸人共に集りて。憂愁して相視て曰。汝吾前を離れよ。々々々々々々々と。猶今時人

有て極めて相瞋恨すれば。其前にあることと許さゞるが如し

次に林藤沒し已て。有情の福力に由て妙香稻(よき香のする稻の事なり)ありて種ざるに自ら生じて糠穢なし長さ四指なり。朝暮に收め刈りて苗隨て生ず。朝暮の時に至て。米便ち成熟す。復屢取ると雖も異狀なし。此を以て食に充つ。長壽にして住す。時に彼の有情。段食に由て男女の二形を生ず。則ち相染著して遂に相親近して。因て交會す。諸人之を見て競て糞掃土石を以て之に拋て曰く。汝は是れ惡むべき有情なり。此の非法をあす咄哉大どへにて一なんぢいまかつていふに汝今何が故に有情を汚すやと。遂に擯(入入乃中戎外ふ追い出して同じすまい我許さじ)して衆外に出し同居を許さゞるに。猶今日の。初めて婚嫁する時。人皆香花雜貨を以て。之に拋て曰く。願くは常に安樂ならんと。當に知るべし。昔時の非法を今時の法となし昔時

の非律を今時ハ律となし。昔時の嫌賤を。今時は美妙とする

ふと

彼の時諸人。擯出するに由るが故に。彼の悪を行ずるを樂ふ者。遂に共に集りて。家を造りて。其身を覆ひて。而も非法をなす。ふれ家宅を立る最初なり。次に彼の諸人。若日没の時。若ハ晨朝の時。飢に由て稻を取り。毎日充足とーエ餘殘ぬことらしめず時に一の惰夫あり晨に起きて。稻を取り。兼て昏時の分の稻をも取り來る。昏時に至りて。同伴あり。倶に呼で稻を取らんと欲す。彼れ答へて曰く。汝自ら取り去れ我れ晨に既に暮時の糧を取り訖れりと。彼の同伴此の語を聞き已て。意に讚じて曰く。此れ大に善ふ我も亦二日の糧を兼ね。取り來らんのみと。其時別に一人あり。此の語を聞き已て。復曰。我ハ三

日の稻を取り來らん。復一人あり。此語を聞き已りて。復曰。我は七日の稻を取り來らんと。乃ち七日の稻を取り歸れり。更に一人あり。來て其人を呼で倶に稻を取らんと欲す。其人。報じて曰く。我れ先に既に七日の稻を取訖れりと。彼の人聞訖て。歡喜して曰く。是れ好方便なり。我は今日半月或は一月の稻を取り來らんと。此の如く漸く前數に倍す。此の貪心日々増長するに由て遂に稻中に糠穢を生ず。彼の先の時には晨に刈て夕に生じ。夕に刈て晨に生じて。其實尚好かりしも今貪心を以ての故に。一たび刈るの後。更に再び生ぜず。假令生ずるも。其實漸くにして惡し。茲に於て諸人競ひ來て散穫す。或ハ遺餘のあることあれば。漸々に惡なり。時に諸人復一處に集りて更に相悲歎して曰「我等昔時。身體光悅にして

飛行自在に端嚴具足し歡喜を食とせり（昔は身に光りわたりて空中を飛び走り身清淨にして喜び食とす）後地味を以て食とすれども。何は好き香あり。地味を食すること。多きが爲に。我等諸人。身乃ち堅重にして。光明遂に滅し。神通乃ち失す。因て種々の暗損の事に遇ふ。諸人悲泣して。日月星辰を。生ぜるを感ぜ。然るに食多き者い。身色轉た暗く。食少き者は。身なは光悅あり。是故に遂に。二種の顏狀を成じて。たがいに相輕賤して曰く。我は是れ端正。汝は是れ醜陋と。之に由て諸人互に相輕毀して。展轉して不善心を生じ其時地味皆滅して。地餅を生じ。地餅盡て。林藤を生じ。林藤滅して。香稻自ら生じて。糠穢あるなし。大さ四指あり香味具足せり。我等之を食して。長壽にして住せり今貪心積集するを以て。其稻實小惡にして。糠穢を生じて。其の稻力無くして。採

收すれば。再び生ぜず。茲に於て諸人相議して曰く。我等田地の界畔を分ち作らんと。其時に各々。境界を分ちて。之を採る此は是れ汝が地なり。此は是れ我が地なりと。是に由て。始て世間に田地の界畔を立て。始て耕種を作す。（是を耕種の始とす。又財產の始なり）後に一人あり自ら田ありと雖も私に他の稻穀を盜めり。一人あり見て之に告て曰。汝今何が故に他の稻穀を取るや。後更に作すこと勿れと（是れ勸誡の始なり）然るに彼れ。盜心息まゞ。第二日より及び第三日に於て。亦復盜み取る。衆人之を見て告て言く。汝ぢ先に三度私に盜めり頻りに勸むれども。息まゞと。乃ち推捉を行じ。衆中に於て。具に上の事物を述ぶ。衆俱に告て曰。汝自ら田あり。何を以て三度まで。他の田穀を盜むや。此語を勸め已て。乃ち之を放逐す

彼れ稻を盗むもの大衆に告て曰。此諸人等。少稻穀の爲に。今故らに我を捉へて大衆に對して。我を毀辱すと。大衆亦告て曰く。何が故に少稻穀の爲に。人を捕へて摧毀し。衆に對して之を辱しむるや。後爾るべからずと。此盗に因るが故に遞に相毀辱他をそしりてはずかしむること す。此に由て大衆俱に集りて議して曰く。汝等具に此の事を見る。他の穀を盗むが爲に。衆に對して。遞に相毀辱す。二人何れか罪あることを知らず。我等の意。衆中一人の顏色端正にして。形容具足し。智慧通達する者を擇びて立て。地主とせん。過ある者は治罰し。過なき者は養育せしめんと欲す。我等衆人種る所の田。各々法に依て。六分の中。其の一分を與へんと。其時に衆中に。如上具德の人を擇び（よく德を具へる人をいう）主に上げ得て。乃ち立て地主とす（是を帝王の始とす）其時衆人地主に告て曰く。衆中若し犯者あらば。請ふ如法に治罰せよ。若し犯無き者は。當に養育すべし。我等衆人六分の中。其の一分を與へんと（是を租稅の始とす）其時に地主。彼の諸人を見て若し過ある者は如法に治罰し。若し過無き者は。如法に養育す（是を律の始とす）衆既に同意して。立て地主とするが故に大同意と名づく。能く劣弱を擁護するが故に。刹帝利と名づく。如法に國を治め。能く諸人をして。歡喜せしめ。戒行智慧あり彼の主の子孫相續して正法を以て國を治む。漸やく年序を歷て殺生邪婬妄語惡口等の十惡。漸次に增長するに隨て。彼王惡を罰し善を賞し。正法を以て國を治む。是れを世間輪王の。十善と名づくなり。

世間出世間の十善の差別とは。世間の十善は。即ち上に

明ず所の十善にして。太古の時に。聖王出て。人民を統御
ずるの正法にして。即ち人たる道の根本なり故に能く
之を守る者は。現に修身治國利民の益あり。當來には必
ず。天堂に生ずることを得是を世間の十善と名づく
又忉利天上の帝釋天王。能く十善を以て。諸の天衆の。放逸を
誡慎せしむと是れ天堂の十善なり
次に出世間の十善とは。一には聲聞乘の十善。二には緣覺乘
の十善。三には菩薩乘の十善。四には佛乘の十善。五には秘密
乘の十善なり。偖て上の世間の十善は現に修身治國の益お
り。後に天堂に生ずるの樂果あると雖も。其果報盡る時は。還
て三塗に墮ると猶ほ矢を虛空に射るに。力盡きて。還て地に
落るが如し。何とかなすべき。未だ貪瞋痴等の。煩惱の根本たる我

見を斷ずることと無きが故に。更に種々の煩惱を起して。十惡
を行ずることと有るを以てなり。故に世間の十善を有漏外に出で、
すればなり十善と名づく。今此の出世間の十善は。彼の煩惱の漏
失する根本たる我見を斷じて。永く三惡趣を離れ。漸次に貪
瞋痴等の。煩惱を斷じて。永く涅槃に入て生死に迷ふこと無
し是を出世間の十善と名づく此中五種の別あり
一に聲聞乘の十善は。唯自調自度として。自から務めて。生死を
離れ。涅槃に歸するを目的とす。故に彼の生々世々の。父母四
恩に對し濟度して。共に涅槃に入るに。遑あらざれば。其の無
漏の功德。尊とし雖も。自利にのみ止りて。他人に及ぼすこ
と尠しとす。
二に緣覺乘の十善は是亦大途。聲聞の十善に同じ。然れども。

其智慧稍深利にして。百劫の間修行して。百ち種々の行を修し。復た能く衆生を利益し。三十二相を具足して小分利他の功德あり三に菩薩乘の十善とは。三大無數劫長きこと數へがたきほどなり の間三界生死欲界と色界と無色界とあつて生たり死たりするところに在て。六度萬行六度とは施しと慎みと忍ぶと進むと定めると明らかなるとより都ての行を修し。又廣く布施愛語。利行。同事の四攝の行を修して。普く一切衆生を利益し。而して後に八相成道して。多くの衆生をして。聲聞緣覺菩薩の三乘の位に登らしめ自利々他の功德を圓滿して菩提涅槃の妙果に至るを菩薩乘の十善戒と名く。此中菩薩は六度万行を修する故に。十善戒の外に餘行あるに似たりと雖も。今十善を根本とすと云は。十善は是れ一切の功德を該攝するの。總相戒なればなり。若し別相に就かば六度万行無量の行無量戒あり。若し十善を攝して六度の行となさば不殺。不盜。不婬。不妄の四戒い是れ擅波羅密なり。曰く。衆生に無畏施等を與ふればなり。不兩舌は是れ尸羅波羅密なり。不惡口は是れ忍辱波羅密なり。不綺語は是れ精進波羅密なり。不貪不瞋は是れ禪定波羅密なり。不邪見は是れ般若波羅密なり。故に十善と六度とは開合の不同なり若し六度を開けば万行となり。十善を開けば無量の戒となる故に菩薩三大無數劫の間。戒定慧等の六度万行を修すと雖も其本體を攝すれば。十善戒を出ざるなり

四に佛乘の十善とは。一乘佛性。實相の眞理を本として普く世間出世間の一切の善法を開會して。一佛乘の中の切德法門なりと體達するを以て。世間。出世間。聲聞。緣覺。菩薩。五種の十善は皆これ自心本具の佛性自から本より具へたる佛の性と云ふ也の切德にして。一乘

實相の妙戒と。無二無別にして少しもかわらぬといふてとなり差別あることなし
譬へば猶は海水の一滴の如し。滴々皆海水にして。海水の外
に一滴なく。一滴を離れて海水なきが如く。戒々皆實相の妙
體にして。實相の外に戒なく。戒を離れて實相なしと。了達す
る是を一乘佛性の十善とす
五に秘密佛乘十善とは本有無垢の本から少しのけがれが無き也淨菩提心の戒
なり。此戒は諸佛自性の戒なれば。一念の殺心も生ぜざるな
り。殺心なきを以ての故に不殺生戒と名づく。餘の九戒も亦
此に倣ひて說くべし。今此の十善戒は皆これ眞言行者の淨
菩提心の切德にして。一一の戒。皆本有淨菩提心の功德なり
又人といへば皆人なり。一一の戒皆戒波羅密。菩薩の體に非
ざる無し。又心佛及衆生は同一法界にして心も佛も世界の生あるものも皆な同く一つの法界に居る

持犯たもつ者も開遮。因果自他の法皆是れ本具の佛德なりと
達して。不持にして持し。不到にして到る。是を秘密の十善戒
とす
以上輪王。及び天堂の。世間二種の十善と。出世間の聲聞緣覺
菩薩佛秘密乘。五種の十善と合して七種の十善戒を。總稱し
て今此の和讃に歸命頂禮十善戒と。讃歎し奉るなり。歸命と
は。我身命を投じて歸依し奉るなり。頂禮とは我最重なる頭
面を以て。十善戒所具の。三寶に歸依し。之を頂き奉るなり

歸命頂禮十善戒　十方三世の諸如來の
三十二種の妙相も　この淨戒を種因とす
歸命頂禮の一句は上に既に釋し訖る。今此の次の三句は三
世の諸佛皆此十善淨戒の功德を以て因行として彼の佛の

妙色身を獲得し玉ふを明す。此十善は各〻十思を具足す（十思とは先づ不殺生戒を持つに先ちて一離殺思二勸導思三讃美思四隨喜思五廻向思の五思を起し又此戒を持つの後心に於て更に上の如くの五思を起せば前後合して十思となる殺生戒の如く餘の九戒にも各十思を具すれば十善合して百思あり）故に十善合して百思となる。佛は其功德を修して前佛の前に於て誓て曰く。我當來成佛の時。今佛の如き三十二相の功德を成就すること得て。一切衆生を濟度せんと。且つ一佛二佛乃至多佛に逢ひ奉りて。十善戒を修行して。足下千輻輪相等の三十二の妙相を感得することを得て。佛身を成就し給へり。故に次の句に此淨戒を種因とすと讃歎し奉るなり

若秘密佛乘の意ならば。此三十二相は自心本有の佛身の相好なれば。行者一念に本有の佛性に契證すれば則ち一念に成佛す何ぞ必ず他佛に由らんや。但し此本有の佛性に契證するの方便他にあらず。即ち下に明す所の自己の身口意の三密即ち秘密の十善の修行に由て速に本有の三十二相を開發するなり

戒定智慧も三密も　三十七の道品も
身三口四と意三より　皆生じたる功德なり

戒とは在家の五戒八戒。沙彌の十戒。比丘の二百五十戒。比丘尼の三百四十八戒と。菩薩の三聚淨戒。秘密の三昧耶佛戒等皆此の十善戒を本として出生するなり。定とは禪定として身心を寂靜にして。世間の四禪四無色定及び出世間の小乘所明の四念處四如意足等の定と。大乘の首楞嚴定花嚴三昧及び秘密の法界三昧等皆此十善より生ずるなり。智惠とは唯世間の通常の智慧にあらず。小乘に依て明さば三界皆

苦の道理を知り諸行無常の眞理を悟り。一切法無我の極理に達して無始以來の我見煩惱を斷じて。貪瞋癡等の一切の迷惑を離れて清淨無着なること滿月の虛空に懸るが如き轄然大悟の智惠を云ふ。大乘に就て云はゞ上の四諦無我等の智惠の上に。更に法無我の眞理に達し。五蘊皆空の道理を明らめ。生死涅槃に於て苦樂の二相を絶したる絶待中道般若皆空の智惠等を云ふなり

次に三密とは眞言密敎に於て諸佛の身口意の三業の實相を說示するものを三密と云ふ。謂ゆる口に諸佛の眞言あり。身に諸佛の印契あり。心に諸佛の三摩地あり。此三密を衆生に授くるの法門を眞言秘密敎と云ふなり。此身口意の三密は彼の身口意の十惡を離れて清淨無染にして始て諸佛の

三密と相應することを得るなり。謂ゆる止善と行善との二種の十善の中。行善の極理是を諸佛の三密と云ふ。是を過て更に上法あることなし。左れば諸佛菩薩の因果の萬德は此十善を出で一法も有ることなきなり　三十七の道品とは四念處と四精勤と四如意足と五根と五力と七覺支と八正道とを云ふ。道品とは道とは覺智の義なり。仍て新譯には菩提覺と譯す分法と云ふ。分とは佛果に至るの因分の一分の功德なりといふ意なり。此三十七品の因行に依て能く佛果に至るなり此の如く等の功德は悉く皆此十善戒より出生する故に。次の二句に身三口四と意三より皆生じたる功德なりと稱讚するなり。身三口四意三とは卽ち十善戒のことなり。謂ゆる身三とは不殺生と不偸盜と不邪婬との三戒を云ふ。是

れ身業を謹み持つものなり。口四とは不妄語不綺語不惡口不両舌との四戒を云ふ。是れ皆口業を慎み持つ所の戒なり。意三とは不慳貪と不瞋恚と不邪見との三戒にして。是れ意業を慎み持つ所の戒なり。此の如くの戒定惠の三聖行と及び身口意の三密も。三十七の道品も皆此身三と口四と意三との十善戒の功德を涵養し増長擴充せしものにして。凡そ菩薩の因より果に至るまで修行する所の一切の萬行は皆な此十善戒より出生せざるはなければ。結して皆生じたる功德なり」と云ふなり

世間諸善の根本にて人の人たる道なれば

出家在家も持つべく貴賤老少奉ぜべし

世間諸善の根本とは。これは上に明す所の世間輪王の説所

の十善を始めとし凡そ世界に居らゆる一切の善根は皆此菩薩の十善戒を本として生ずる所なれば。諸善の根本と云なり人の人たる道なればとは。此は輪王の十善及び儒教の五倫五常。神道の神隨の道。西洋の倫理の學。等凡そ人の作すべき所の道は皆此十善戒より生じたる枝末細目にして若し人此の十善を慎み護れば世界萬國適くとして行はれざる所なし。之に反して此十善に背くことある時は。國の華夷と時の文野と人の貴賤とを問はず。必ず不虞の災害を招き來すなり。故に人の人たる道と云なり。出家在家も持つべくとは。出家は世間の十善は勿論堅固にこれを持つべし進んで二百五十戒即ち聲聞の十善を持ち更に緣覺の無漏の十善をも持つべく。又大乘に説く所の菩薩化他の十善と

一乗無縁の慈悲中道の十善と秘密の唯心三密の十善との一切の十善戒をも皆悉く是れを持つべきなり。貴賤老少奉ぜべしとは昔し某親王の歌に

「聞ならく那落の底に入りぬれば。刹利も首陀も同じかりけり」と詠じ給へり能々此の歌の眞意を察すべし。凡そ因果の眞理は人の貴賤と老少と文明と野蠻とを問ふなく。善をなせば必ず現當に善果を招き。悪を行へば必ず現世後世に悪道に入りて無量の悪報を感ずること。彼の鏡像の人面の好醜と男女と老少とに隨つて其の影を寫すこと毫も謬るなきが如くなれば。能々此理を察して貴賤老少を論ぜず。苟も此の十善因果の眞理を聞くものは。これ宿善の招く所佛天の授くる所なりと信知して。深く歡喜の心を生じて隨順

奉行すべきなり

龍樹菩薩の教誡に

渡に船の無き如く佛果を期して戒なきは

龍樹菩薩とは佛滅後六百年出世の佛の代理者にして。住壽

三百歳初め一百歳は世間の學理と及び外道の宗教とを學

び次の百歳は諸の小乗教を學び。後の百歳は諸の大乗教を

學び。終に望で秘密佛乗を傳受し給ひし天士にして。亦即今

本邦に弘通する所の佛教諸宗の高祖なり南印度に傳ふる

所の小乗の人も共に尊崇する所なり。今和讃に述る所は其

著作に係る大智度論に曰く譬へば足なくして行かんと欲し

翅なくして飛んと欲し船なくして度らんと欲するが如き

是れ得べからざる若し戒なくして好果を求んと欲するも

得べからざること亦是の如し。若し人此戒を棄捨し山居し苦行し菓を食し薬を服すとも。禽獸と異るなし。或は唯水を服して戒とし。或は乳を服し或は木食し。或は髪を剃り或は髪を長くし或は頂上に少許の髪を留め。或は袈裟外道にも亦袈裟あり佛弟子の袈裟へ宜く佛制に隨順して如法に製すべきなり を着し。或は草衣を着し。或は木皮を着し、或は冬水に入り。或は夏火に炙り。若しくば自ら高巖より墮し。若くは恒河の中に洗ひ。或は日に三度浴し再び火を供養し。種々の祠。種々の呪術の業を受て苦行するも。此の戒なきを以て空しく得る所なし。若人あり。高堂大殿に處して。好衣美食すと雖も。能く此戒を行ぜれば好處に生ずることを得。及び道果を得ん。若くは貴若くは賤若くは大若くは小。能く此淨戒を行ぜれば皆大利を得。若し此戒を破ちば貴賤大小となく

皆意に隨て善所に生ずることを得ず。復次に破戒の人は譬へば清涼の池に毒蛇のあれば。中に於て澡浴せざるが如く亦好花菓樹に。而も逆刺多きが如し。若人貴家に在て生れ。身躰端正にして。廣學多聞なりと雖も。而も持戒を樂はず。慈悲の心なきものも。亦復是の如し。人貧賤なりと雖ども而も能く戒を持つものは。富貴にして而も破戒なるものに勝れり華香木香は遠く聞くこと能はず、持戒の者は香十方に遍ず持戒の人は安樂を具足して。名聲遠く聞こへ天人敬愛す。現世には種々の快樂を得若し天上人中にして。富貴長壽を欲せば之を取ること難からず。持戒淸淨なれば所願皆得。云云以上論の意に依るに。假令無上の佛果を得んと願ふも若し此の十善戒なき人は。種々の惡事を犯すが爲に。三惡道の中

に墮して。生々世々に。人間天上に浮び上るを得ざ。況や何ぞ無上の佛果に上ることあるべけんや。譬へば此に人あり。遠く洋行せんと欲して。而も航艦に上ることを欲せざるが如し。豈に徒らに游泳して到ることを得べけんや。今人として道德を培養し。佛法を求めんも。若し此十善戒を護持せざれば彼の航艦に乘らざるが如し。信なるかな龍樹大士の誠誡。誰か謹奉せざるべけんや

昔し比丘あり行く道に渴きに逼り水を得て蟲の命ちをあはれみて死して道果を得り鳧上來飯命頂禮以下は指十善戒の功德を讃歎し奉るなり

此より以下「此道撥無する莫れ」と言ふまでは不殺生等の十善戒の一々の別德を讃歎し奉るなり。中に於て「昔し比丘あ

りと云より夭死轉じて長壽せりと云迄での八句は第十不殺生戒の功德を稱揚讃歎し奉るなり。此中初の四句は水中に蟲あるを飲まざして死して道果を得たる功德を讃歎せるなり。

昔し佛の在世に二人の比丘僧ありき。夏三月（四月十五日より七月十五日までの間）佛の教に依て安居と云ふを修行せり（安居とは夏三月の間大地に多く蟲あり。是故に恣に旅行遊覽等を爲す時は多くの蟲類を害することあり。又夏時は暴雨等あるが故に一所に房を定て三ヶ月間坐禪を練修し或は佛經を暗誦し佛語を依學して。濫りに他處に遊行し去らざるを安居といふなり）時に彼の二人の比丘三月の夏安居を滿じて。相語て云ふには我等二人如來の正法の中に入りて出家し。戒律を

受け安居を行ぜと雖も未だ會て世尊滿月の尊容を拜し奉ら
ぜ。願くは此より去りて親り世尊を拜し奉らんと談訖り
て法衣を整へ鉢を持して道に從て進行せり。時に季候殘暑
強しして。二人頻りに渴に苦しめり依て頻りに水を求む一
りの比丘水を得て相喚ぶ。二人至り已て此水を飲んと欲し
て熟〳〵水中を見るに無量の細蟲ありて飲むべからぜ。一比
丘の云く我等二人。世尊を見奉らんと欲して玆に至れり。若
し渴乏の爲に中途にして死せば世尊の尊容を見奉るに由
なし。故に寧ろ戒を犯すとも此水を飲て早く道に從て進行
せんには如かじと。一比丘の云く世尊懇に制誡して蟲ある
水を飲むことを許し玉はぜ。寧ろ死すとも佛戒に背くべか
らぜと云ひて遂に渴死せり。一比丘は蟲水を飲むが故に生

存することを得て舍衛國に至り親り世尊を拜禮し奉ること
を得たり。諸佛の定法若し客比丘初て至ることあれば。如
法に問訊して汝は何の處より來る。何れの處に安居せしや。
梵行修し安しや否や。道路安穩なりしや否やとの給ふ是を
諸佛の定法とす。仍て世尊此一比丘に問て汝何れより來れ
るや何の處にありて安居せしや。梵行修し安しや否や。道路
安しや否や。同行の者ありや否やとの給ふに。時に應じて比
丘聲を擧て大に哭す。故に佛何の故に大に哭するやと問玉
ふに。彼の比丘答て同梵行者あり二人相約して親り世尊を
見奉らんと欲して共に進て同道旅行せり。彼比丘蟲水を飲
むことを肯ぜぜして身命過せり。我水を飲むに由て獨り此
に至ることを得て世尊を見奉ることを得と云へり

時に彼の渇死せし比丘命終して忽ち四王天に生ぜること
を得たり凡そ天道に生ぜる者は自然に宿命通を具足して
必ず先づ三心を生ず。一には我今の所生の處は何の天なり
と知り。二には宿生は何の處にありしと知り。三には曾て宿
生にありて何の善業を修せし功德に因て彼れより命終し
て今此天上に生ずることを得たりと。彼の渇死の比丘既に
四王天に生じ身相具足することを得て三心を起し竟て謂
らく我今此天の身を具足することを得るは一に是れ世尊
の善説法律に依り眞正に出家して戒律を護りし功德に依
らずんばあらず。故に先づ閻浮提に下りて世尊の許に至り
世尊の足を拜し奉り世尊の深恩を謝し奉らんと。即ち天上
より下りて世尊の足を禮し奉り。三版依法を受け自ら誓て

不殺生等の五戒を受け訖りて法眼淨を得たり。一邊にあり
て恭敬して法を聞けり。其身光明赫奕たり時に世尊彼蟲水
を飲みて來りし比丘に告げて汝彼を知れりや否やと言給
ひて。彼の天子を指し給ふに比丘知らずと答ふ。世尊則ち呵
して汝は痴人なり。我肉身を見んと欲して蟲ある水を飲み
罪を犯し來りて我肉身を見ると雖も。未だ我法身を見ること
能はず。彼の渇死せる比丘は既に天道に生じて是の如く
光明の色身を得て汝に先ち既に來て我肉身を見。また能く
法眼淨を得て我法身を見ることを得たりと示し玉へり
凡そ世間の凡夫は猥りに此身命を戀着して。種々の惡業を
作り眞實に如來正法の戒律を信受し奉行することを能はず。
生々世々に生死の流に浮沈して。六道に輪廻し解脫涅槃の

彼岸に至るを得さるは。最口惜く浅猿しき次第ならぞや。此二人の比丘僧は共に如來の正法を信じて。齊しく發心出家して如法に剃髪し如法の衣鉢を持し如法に梵行安居布薩の法を行じ。如法に隨意法を行じ訖て共に同じく親り世尊金色の尊容を拜し奉らんと道に從て旅行しながら。一比丘は渴きに。遍り水を得て蟲あるを知りながら。只管世尊を見奉らんとのみ欲ふが爲に。此蟲水を飲み世尊を見奉ると雖も。彼れ世尊の戒律を犯し殺業を作るを以て還て世尊の呵責し給ふ所となる。然るに彼の一比丘は深く世尊の法敎を奉じて。堅く世尊の戒律を謹護するが故に蟲の命を憐みて。遂に渴死すと雖も死し訖て還て天上に生じて彼の生活せる比丘に先だちて世尊金色三十二相の色身を見奉り。亦能

く法眼淨を得て佛の五分法身を證得することを得たり。蓋し浮世幻電の身命は朝に歡樂を極むるも。一息忽ちに絶すれば夕を期し難し。憐れ此の墓なき無常の身命を戀着して。永世不朽不老不死の思をなすは實に甲斐なき次第ならぞや。世尊我等の迷執癡情を憐みて。此生死の身心は無常無我にして頼み甲斐なければ早く貪瞋痴の三毒を除きて十惡不善を止め十善業道を勤修して速に解脫の聖果を得せしめんが爲に。此の無比の淨戒を說示し無上の妙法輪を轉授し玉へるものなれば。努力〳〵勉めて如來の淨戒を守り梵行を修して。疾く一大事因緣を成就すべきなり。彼の二人の比丘は共に如來の正法に入り眞正に出家すと雖も。一は天身を得て且つ如來の五分法身を證得し。一は如來の戒律を侮

り常識に隨ひ進止して還て如來の呵責を蒙れり。況して今日末代の比丘破戒濫行にして。悟道し往生し見佛聞法せんと欲するは木に緣りて魚を求むるが如く至難の事なり。今日に至りては此般の僧侶も亦甚だ見ることを得がたし。多くは是れ無戒無慚にして因果を撥無し。還て如來の正法律を誹謗し謗三寶の罪業を恐れず。靦然として懼るゝ所なきに誠に歎息の至りならずや

今此本會の善男善女に。深く十善十惡因果應報の眞理を信じ佛あることを信じ。戒法あることを信じ。僧あることを信じ自ら能く十善戒法を護持し又能く人を敎へて十善戒法を護持せしめ。善惡因果應報の眞理は自心本具の性德にして佛の所作にも非ず。祖師の所作にも非ず。是を護れば天然

として吉慶幸福を來たし將來必ず解脫の妙果を得ん。これに背けば必ず災殃凶害を招き未來永く惡趣に沈淪して。父母三寶の名をも聞くことを得ざるの惡報を感ぜんことを信じて深心に十善戒躰を護持せらるゝは。實に末代希有の善事にして宿善の招く所なることを深信省察して佛祖の鴻恩を報謝し父母國王四恩の鴻德を酬答せんことを記臆して。日に勤めて放捨せられざらんことを是れ愛國護法の男女諸賢の一大事因緣なり

又八歳の小沙彌の

入るを救ひし功德にて　水の流れて蟻穴に

天死轉じて長壽せり

これは昔佛在世の時。目蓮尊者の信者あり。深く正法を信じ尊者の高德に感じて。其所生の八歳の兒を召し具して來り

て尊者に申して言く。今吾れ此小兒を供養せんと欲す願くは愛愍を垂れ。度して弟子と作し給ふべしと。尊者これを受けて度して出家せしむ。後熟ら〳〵此兒の相貌を觀視し給ふに。此兒酷だ短命にして夭死の相あり尊者驚て更に定に入りて。其業嚴を觀見し給ふに。後七日を過ぎて必す命終すべし。尊者思へらく凡そ父母の其兒を愛惜するの情深からぎとせぎ。此兒若し吾が膝下にして死せば父母は必ぎ迷悶して此念を作して言ふべし。吾が生兒若し尊者に供し捨て、出家せしめざれば忽ちくは死を致すこと莫からんと因果を知らぎして安りに悔恨の心を生ぎべし。今須らく方便を用ひて父母の家に遣すに如かじと。尊者如是思惟し畢て乃ち此少沙彌に告げて言く。少沙彌よ今日汝を父母の許に遣

ちんと欲に汝は父母を見んと欲するや否やと。小沙彌喜び て答て曰く父母を見んと欲す希くは聽許し玉へ。幾日許り滯在して尊者の房に還るべきやと。尊者曰く七八日を過て還るべしと乃ち尊者此小沙彌を遣はして父母の家に向はしむ。小沙彌尊者を禮辭して路に從て行く。時に天雨を降らすを以て。小沙彌は一の樹根の下に休ふ。見るに雨水流れ來て樹根の下の蟻穴に入る。時に數千万の蟻子。兒を率ひて穴を出るあり卵を含みて走るあり。又多くは皆水に沒し死するあり。小沙彌此狀を觀て急に泥土を聚めて。小堤をなして其雨水の蟻穴の中に流れ入るを防塞し。訖りて天雨の收るを待ちて走りて父母の家に到りて相歡樂して七日を過れり。時に小沙彌父母を辭して尊者の房に飯れり。尊者翌に定

中にして正に小沙彌の必七日を過ぎて命盡きて夭亡するを觀見し給へるに。今既に七日を過ぎて命存安穩にして房に皈還するを以て。之を怪しみて熟らく小沙彌の顏貌を視給ふに曩の夭死の相は更に轉じて長壽の相と爲れり。尊者驚き怪しみて問て言く小沙彌よ汝は父母の家に到り何等の善根功德の事を作せしやと。小沙彌の曰くわれは幼愚にして未だ何等の功德を作すことを知らず。唯だ日々に遊戯して日を費すのみなりしと。尊者更に問て言く。往來の間にして何か功德の事を作すことあらざりしやと。小沙彌曰くいかにも小沙彌曩に鄉里に赴く途中にして。天雨に逢ひて樹根に休みし時。彼の蟻穴に雨水の流れ入りて。數千万の蟻子の水中に沒溺して死を致すを觀て之を救濟せしことと。尊者歎じて言く必ず此功德に由りて小沙彌は夭死の業を轉じたるならんと。更に定に入りて觀見せしに此小沙彌は此蟻子の命難を救濟せし功德に由りて。曩の夭死の業を轉じて大に長壽の業を成就せしを知り給へりと。後此小沙彌長じて正法を修行し。道果を得たりといへり。今日末世に在りても亦往々放生の善行等に由り。夭死の相あるもの。難治の疾病あるもの。其非業を轉じて無病長壽の好果を得ることありと聞けり。庶幾くは諸彦務めて放生の作善を行じて。現身の業病横死の禍を除き。且つ將來解脫の勝緣を種殖せられんことを希望す。豈況んや由なくして殊更に銃砲。羅網釣鉤を用ひて他の禽獸。魚甲の命根を奪取して以て歡樂の思を作すこと其の顚倒の甚しき。其殘忍黑業の罪恐れ

ても亦恐るべきならぢや今時殺生を好む者にして自ら形不具を感じ或は其子女にして非業の惡疾を感じ又は身躰不具不祥の兒を生じ不意に怪我することありて横死する等の事蹟は古今見聞するもの枚擧に遑あらぢ。請ふ諸人深く此因果應報の眞理を信じて猥りに殺業を作さぢ。堅く十種の止善を護り勉めて放生。施行持齋等の十種の行善を奉行せらるべし。況んや復刃を以て人を殺害し。呪咀して殺し毒藥を以て殺し或は胎中の兒子を採殺し。墮胎せしむる等の罪惡其業報幾許ぞや。恐れ慎みて深く懺悔を作し。速に自他を勸めて無始刼來の惡業を改悔し勤めて行善を作して宿業を贖ひ。以て自他出離生死の勝業を務むべきなり

又毘舍佉母の指の環の落て入江に沈みしも元の指端に還りたるこれは十善戒の中第二不偷盜戒を讃歎し奉る因緣なり。昔佛世尊廣嚴城より出て室羅伐城の逝多林給孤獨園に來りて。住し給ふ。その時に勝光王の大臣の夫人に毘舍佉鹿子母といふ信者あり。佛敎を信じ三寶を尊崇外護すること一方ならぢ。佛の斯處に來り給ふを聞て歡喜自ら堪ふること能はぢ。乃ち往て敬禮せんと欲し。直に諸の珍好の瓔珞を以て徧身を莊嚴し從者を具して。給孤獨園に到り已りて瓔珞を脫ぎて其從者に附し。鮮白の服を着けて。精舍に入り。一心に佛足を頂禮し奉る世尊爲に種々の深妙の法を說給ふ。毘舍佉母身心淸涼坐に愉悅快樂を覺え佛足を頂禮し已りて。退き歸る時に彼の從者其瓔珞を以て。園樹の下に置きて遂に

忘れて家に歸る

是より以前世尊比丘に勅して。金寶を執捉すること莫れと制戒し給ふ。時に阿難尊者。其瓔珞を見て。便ち念へらく世尊不捉金寶戒を制し玉ふ然りと雖も。此等の時には必ず當に許し給ふべしと云ひて即ち收め取りて。自ら往て世尊に白す世尊の言給はく。善哉々々阿難よ我未だ許さずと雖も。汝已に時を知る。若し戒を說かん時に。此等の因緣ある時には手に金寶を觸るゝも犯なしと說けと開許し玉ふ

毘舍佉母家に皈り。數日を經て。從者に彼の瓔珞を問ふ。從者驚きて答て曰く。寺中の樹下に遺れ置きたりと。母の曰く速に往て取り還れと。其時に毘舍佉母の子息側に在りて。是事を聞き笑て母に語げて曰く。豈庫內の物を取り來らしむると同じからんや。寺中は種々の諸人群集す。何ぞ今に於て。猶

これ有らんや定めて失べるのみと。母曰く否よ我生てよりこのかた。未だ曾て一物をも遺失せしことあらず。汝從者たゝ往て取り來れ必ず定めて得んと從者命を承て。遂に給孤獨園に往く。阿難尊者之を見て便ち瓔珞を出して之に授く從者喜び受けて。速に持歸りて。之を母に授く。母其子息に告て曰く。我財を失はずと云ふ。此言妄ならずと。子息又念へらく阿母斯く言ふと雖も未だ必ずしも信ずべからず。我れ當に其事の信否を驗すべしと。便ち其母の金印の指環を取て之を井中に投ぜり。時に家婢水を汲むに釣瓶の中に光れる物あり。怪みて之を擧ぐれば。即ち前の指環なり。是を母取て以て指に環くこと舊の如し。然れども其子猶之を怪み疑ひて。止まず。後或日。母子航を同ふして。江を渡る時。其母の指環

を取て。之を江の深水の中に投ぜ後數日を經て。家人市に詣り魚を買て歸る。其魚の腹を裂く。時に腹中に庖刀に支ふる物あり。能々之を觀れば前に江中に投じたる所の指環なり。從者之を母に捧ぐ。故を以て復母の指環に還ることを得たり。既に種々之を試みたるに。皆悉く是の如くにして。失ふことの無かりければ。其子息是に於て始めて母の言の妄ならざるを信ぜり。

此は是れ宿生に於て。不盗戒を堅守し。誓て慈善を行せしの餘報なりと。愼まざるべけんや。然るに今時此の因果應報の眞理を信ぜず不倫盗の福報の欣ぶべきことを知らざる者は此等の因緣を聞くと雖も。只一種の奇談として空しく過ぎ去りて。深く其所由を推求めざるものあり。然れども此般の事を以て若祇た偶然なりとせば一切世間の事。皆偶然の二字に歸せん歟。是れ却て怪しむべきの甚しきにあらずや。何となれば世間現に安りに他物を掠奪せば。後是より甚し き掠奪に逢遇し。之に反して。他人に恩庇を施す者は。後意外の幸福を得ること。古今其例多からずとせず。左れば今現見の事例と及び應報の道理とを以て之を過去及び未來に推すに其理確然たり。されば世間一事一物として此原因結果の眞理に乖違するものは。決して之あるべからざるなり。實に此戒相は法性の功德の顯現したるものにして天然自爾の道德なり。故に智者にして之を持たざれは其智を失ふ。愚にして之を持たざれば刑戮を免れず。王公大人にして之を持たざれば國治らず。士庶人にして之を持たざれば家

齊は也。中國都市も邊裔夷狄も古昔も後世萬々年の後も。之を護ねば福報榮耀あり。之を持たざれば災害身に及ぶ。熙幾は道德に志すの諸賢能々此理を記臆して。謹で戒慎護持せられんことを希望に堪へざるなり

影勝王の象の孚の産に臨みて惱みしも
誓て分娩せしめたり

牧女の操にて
是は第三不邪婬戒の功德を讃歎し奉るなり。影勝王とは摩竭陀國阿闍世王の父韋提希夫人の夫主頻婆娑羅王なり。譯して影勝王と云。此王威光閻浮提に冠たり。後宮に恒に二萬の彩女ありて侍給せり。時に王の乘用の牝象胎孕し分娩の期に臨んで甚だ困難せり。後宮人皆噪々として安んせんとす遂に王の聞に達し王自ら臨御して諸人に使揮す而れども牝象益困んで兒を産することを得也。時に王後宮の后妃以下二萬の彩女に命じて曰く誰か眞實語を以て誓て此象をして分娩せしむる者ありやと時に二萬の彩女各只だ默然として互に相視て語せず。最末に牧女あり其貌甚だ醜なりき。進んで王に白して言く妾願くは眞實語を以て天に誓て分娩せしめんと欲す。之を許し玉はんや否やと。王曰く甚だ善し冀くは眞實語を以て分娩せしめよと。時に牧女進んで天に仰で誓て曰く妾小少より今日に至る迄我夫主の外他の男子に對して一言の私言を交へ他の男子の身支に相觸れしことなし此言眞實ならば願くは此象速に分娩せしめべしと語に逐て兒象産門を出づ。然るに僅に該尾頭産門に繫て離れず諸人之を見て甚だ之を怪めり。時に牧女の曰

く是許の事をも猶障りと成るものなりやと。時に王命じて曰く言の意如何なることなりや。と牧女王に答て曰く妾纔に歳十三の時隣家に五歳許の男兒あり。其貌甚だ美麗なり依て妾之を抱持して愛情を生ぜり是亦他の男子なるを以て眞實語に背反せるか。今此罪愆を懺悔し奉る。仰ぎ願くば之を宥恕し玉へと此言訖るとき。彼の象の母子共分娩安にして快樂を得たりと云云

凡そ眞實語なる者は如此の無形中に功德あり。不邪婬戒の功德能く王の牝象をして。安穩分娩せしめたり。後宮二万の彩女位高く職勝れたりと雖も。此一の牧女の清操の功德に及ばざること千千万万なれば有形の美無形の美に如かざることと愧づべきに非ずや。世人有形無形の區域を分ち有形

上を勉て無形上を勉めざるは十善道德の何たるを知らざるの過なり眞理に有形無形の區別なく道德は還て無形中に向て。培養流行して止まざるものなり。因果應報の眞理思はざるべからず。十善十惡原因結果の天則須臾も之を外にして可ならんや

斑足王の猛惡も　實語の德に感悟して

九十九王の命をも　放ちて道に入にけり

この因緣は昔天竺に斑足王と云ふ惡王ありしが普明王と申す聖王の不妄語の德に感じて自ら惡を悔て佛道に入り

し因緣あり今之を引て十善戒の中の第四不妄語戒の美德を讃嘆し奉るなり

昔印度に普明王と云ふ國王あり。此王精進持戒にして。常に

實語を持てり。晨朝車に乘じて諸の彩女を將ゐて園に入りて遊戯せんとして。城門を出づ時に一の婆羅門あり來りて王に語て曰く王は是大福德の人なり。我身は貧窮なり當に愍念して多少の物を愍み賜はるべしと。王諾して曰く汝の來り乞ふ如く當に施與すべし。須らく我園より還るを待つべしと。此語を爲し已りて園に入りて澡浴し遊戯せり。時に鹿足といふ國王あり。外道の教を受けて百王を捉へ殺して天に祀らんとして一王を欠たり空中より飛び來て彩女の中に於て王を捉へて將ゐ去る。諸女啼哭號慟し。一園驚き城の内外騒擾し悲み惶る。鹿足王普明王を負ひて虚空に騰り九十九の諸王の中に置く普明王涕零ること雨の如し。鹿足王告て曰く大國王汝何を以てか涙くこと小兒の如くなるや。人生るれは死することあり。今會は離るゝことありと。普明王對て曰く我死を恐れず。甚だ信を失ふことを惶る。我生てより以來妄語せず。今日晨朝門を出づる時一の婆羅門あり來つて我に施を乞ふ。我時に是を聽して曰く我園より還て當に施すべしと。無常を慮はず。罪彼が心に貪き自ら妄語の罪を招く故に泣くのみと。鹿足王曰く汝が意此妄語を恐るとならば汝還りて去て七日間婆羅門に施し已て則ち此に還り來ることを聽すべし。若し七日を過ぎて還らずんば我兩翅の力あり汝を取ることを難からずと。普明王本國に還ることを得て。充分に慈善を行し太子を立て王となし大に人民を會して乞に懺謝して曰く。我智物に周からず。國を治むること法の如くならず。當に恕せらるべし。我今日の如き

は身己が有にあらぬ當に早く還り去るべしと國の人民及び諸の親戚頭を叩て是を留めて曰く。願くは王意を留て此國を慈蔭し鹿足鬼王を以て慮りとなすことと莫れ。將に鐵舍奇兵を設くべし。鹿足神力ありと雖も是を恐るゝことなかれと。王の曰く然らぬと則ち偈を說て曰く

宗語第一戒　實語昇レ天梯　實語小而大　妄語入ニ地獄一

ムシロスツトモシントシユミヤツトテコトロニナシアルコトクワイコン寧棄ニ身壽命一心無レ有ニ悔恨一

右の偈を說き已て王發し去て鹿足王の處に至る。鹿足遙に見て歡喜して曰く。汝は是れ實語の人なり。信要を失はぬ一切の人皆身命を惜む汝は死より脫することを得て。還り來て信に赴く。汝は是れ大人なりと。其時に普明王實語を讃歎して曰く實語は是れ人とす。非實語は人に非ぬと此の如く

種種實語を讃じ。妄語を呵責す。鹿足是を聞きて身心清淨にして。普明王に告げて曰く。汝能く是を說けり。今相放捨すべし。汝已に脫することを得たり。九十九王も亦汝に施すべし。意に隨て各本國に還るべしと此に於て。百王各々還り去ることを得たりと。讀者とも因緣を聞きて如何か感覺せらるゝや普明王豈唯昔の人ならんや。今十善を修行し道德を實踐する者は。則ち今日の普明王なり。鹿足王亦豈他の人ならんや今邪教邪學を故あて。佛道に歸入し以て不妄語を持つ。即ち今日の鹿足王なり

頃日或人の曰く。中殺盜邪婬等は本より人の爲すべき業にあらざれは受持する難からぬ。戒妄語の一戒の如きは實に持ち難しと。何となれは商業上は勿論社交上に於

て妄語せざれば今都合を來すの事情あればなりと予是に答て曰く頃年篤信の居士あり。時々寺に來て三寶を禮す其言に曰く小弟本戒受持已來日に月に他の信用を得て家計年に隆んなり其故は小弟常に身を慎み他を欺かず肅然と事を執り人に接するに信切を以てする故偶ま内心不良の客は拂はざれども自ら忌み嫌ふて來らず之に反して篤實温厚の客は予の親切にして欺かざるを知り招かざれども日に弊店に來り集る是れ洵に十善の功德三寶の御恩なること深く感祝に堪へず拜の序ごとに予に對して之を陳謝せらる然るに今君の説は大に彼の居士の語に反す而れども彼居士は本戒を受持すること數年を經て殆ど實驗に富み眞個の戒德の廣大なるに感服せし實語なり決して妄語を貪ること勿れ然るを今君は此悪法の妄語を以て商業上必ず用の眞とせらるゝ者は甚奇と言ふべしこれ恐らくは君十善を護持すること浅きが爲め蔵た舊弊習慣に泥みて眞個に十善を持ち親切に實驗せられざるの故なるべし實には君眞實に三寶に誓て親切に本戒を受持し試みらるべし然るときは久しからずして妄語の悪法にして道德信用を害し不妄語の善法にして且つ道德信用を增し鴻益あることを自知せらるべし

言辯辨舌明孚字に生れし種は不綺語なり

時候和順に資産富み草木さへ皆色を增す

この四句は第五不綺語戒を讃歎し奉る文詞なり綺語とは戲笑雜談の種々與野の雜談を云ふなり中に就て初の二句は等流

果を明し次の二句は境上果を示すものなり
等流果とは習氣によりて成ぜる結果なり謂ゆる習ひ性と
なるものを習果と云ひ又は等流果といふなり此綺語を好
むものは其人物自ら卑野の風に流る之に反して此の
不綺語戒を持つ時は其人躰容貌自ら温厚篤實にして言語
することあれば其言葉柔順にして辯舌爽快明了なること
を得て能く人をして信服し感動せしひることを得若し人
に對して忠諫し教論することあれば人其誠實に感じて必
ず過を改め善に移る隣里鄉邑及び國家の事若し諫することあ
れば其言行はれて大に益する所あるべし此食に紛諍
ある時も其言に所あれば聞く者皆信伏して紛諍を調和す
ることを得べし今現に性質温厚にして能く人民の信用を

敬を得るものあるは是れ前世に不綺語を護持したる所の
結果なりと知るべし
凡そ人に接するに誠實の語を以てして決して假令輕卒の
言葉を須ゐるべからず況して人の精神品行を亂る、樣の
身嫖放蕩の雜談を作し言男女の情欲の事に及ぶ類深く慎
しむべし然るに此綺語は其過失あり徳義を失ひ實に宜
しからざることを知るもの少し却て交際上の必用の具の
如く誤認するものあるは甚だ顚倒の至なり蓋し大聖世
尊の説法の會場に列なる者は上は地上の菩薩より乃至聲
聞天人龍夜叉人非人種々の異類のもの皆如來一音の説法
を聞て各々その智慧根性の分に應じて各其法益を得せし
めて一時に無量の衆生を教化度脫せしめ給ふことを得給

へるは。是れ皆な如來の因位におりて。この不綺語戒を護持し結ひじ原因の功德に由るなり。君を諫めてその言を容れられも。親子眷屬和悅して朋友親戚に信用せられ。若し官にありて政を施せば部下の人民能く其訓令を奉じて。隣里德行を重んじ。名譽四方に溢るゝ等。皆この戒の德なり。

請ふ諸賢各自己身上に取て。之を持つの利益あると之を持たざるの不利なると自ら試みて證知せらるべし。因みに曰く頃日某紳士の話に予は元來無宗教者なり。然るに過般熱海に於て初めて十善の法語を拜聽せし時。殺盜等は固より人たるものにして持たざるべからざるは論なしと雖も口に關ずる四戒は尤も護持し難しと思へり。然れども十善何れも其分に應じて持つ者は。皆十善會員たるを得るとのを承り。遂に請ふて會員となるを得たり。而して歸京の後。諸人に對する時動もすれば綺語惡口等を發することあり。其時心中に忽ち予はこれ十善會員なることを思ひ出して。窃に慚愧を生せり。此慚愧の心以て道德の萠芽を培養するに足るものなりと信せり。茲に於て予が十善戒を拜聽せし以來と其以前とに就て自ら比較して之を顧みれば。其道德上に付損益利不利の間。懸に隔たることあるを發見せるは生前の大幸なり。と云へる某氏の法話の席に列せられたるは僅か數十日前の事なるに既に其德義上許多の鴻益あるを覺ると明言せられたり。されば未だ本戒の法筵に列ならぬ又未だ本會員たらざる諸君は互に相勸奬して。早く會員の列に入り受戒聽講せらるべし必ず。某氏の談話の實にして。虛

ならざることを領知せらるべし

凡そ一切善悪の諸業に三の結果の別あり。曰く等流果と曰く報果と曰く増上果となり。等流果は上に既に粗辨せしが如し、今世に綺語を好む者は。未來に下賤醜陋の身を受け。訥言瘖啞不具等の果報を受け。又言語する所あれば。人信受せざる等これを等流果と云ふ。之に反して今世に不綺語戒を持つものは未來に於て人必ず其言を尊信して相貌温厚の報を受くべし。これは不綺語の等流果と云ふ。今世間に瘖啞盲聾等の形不具足なるものあるは是れ過去に十悪業を作したる報なりと知るべし。次に報果とは綺語等の十悪に由て地獄鬼畜等に生るゝなり

次に増上果とは。上の如く前生の善悪業の結果を只已が一

身の上に感じ招くのみに止まらずして。其業力の餘勢延て其所有の國土。田苑家屋草木衣服器械等に成ぐ顕れ來るもの。是れを増上果と云ふ。今此綺語の増上果とは。其所有の山林林材を出ず田園禾穀少く。草木花實をして種々の損悩を生じて。意の如くならざらしむ。之に反して不綺語の餘報は山林樹菓茂く。田圃意外に收穫多く。菓實は甘味多く家屋堅牢にして傾壊なく。田畦潤澤にして。旱魃の災なく衣服染むれば光澤を増し。蟲蟻鼠鼠の患なく。盗火漂流の災なし牛羊は兒を育して繁殖し。金貨の出息は失墜するなきことを得今。現に性來損耗すること少き人は。是れ前世に不綺語等の善を勸めたる人と知るべしこれ天地自然の道理にして。物の當然なり。誰か謹しみ護らざるべけんや今三報の別を一

言せば。己が作りし善悪業の直接に此肉躰上に報ゆるものを報果習果と云ひ。其田園家屋等に感じ顕はるゝものを增上果と云ふ

人天中に香はしきものは善語に過るなし
妻子眷属和悅して上下人心みな服す

上來十善戒の中。第五不綺語戒まで略解し畢る。次にこの段は第六不悪口戒を賛揚し奉るなり。中に於て初の二句はこの戒の總德を讃嘆し。次の二句はこの戒の別報の功德を演ぶるなり

口は是れ禍の門。舌は是れ災の根と。言語豈慎まざるべけんや「沙彌戒經」に云く。夫れ士の世に處する。斧。口中に在り。身を斬る所以は其の悪口に由ると。悪口の悪むべきこと。喋々を待たゝして。諸君の能く知る所なり。抑も自他の差別を觀。愛憎の隔歴を懷きて。己に順するものには愛心を生じ。己に逆ふものには憎悪を起して。生々世々互に怨み相諍ひて。瞬時の安樂をも受けゝ。終には修羅鬪戰の巷に展轉するもの哀むべきの極ならゝや

今深く我等人類が。今日發育する因縁を觀察するに。其間互に密接の關係を存するものなり。我れ自ら衣せゝ我れ自ら食せゝ。我れ自ら住せゝ。一切の衆生の勞働の恩惠を離れては瞬時も立つこと能はざるものなり。然るを此有恩の衆生に向て。悪口し誹謗するの非理なる。酷だ明なり。豈憐愍の情を以て相救濟せざるべけんや。況や一切男子は。是れ我前生の父なり。一切女人は是れ我宿世の母なるに於てをや。衆生縁の慈悲

況や復天地萬物は我身と同躰なり。一切衆生は我躰と一躰なり。然るを隔別の思をなして。愛憎の見を異にするは。猶已が右の足を惡むに異らぬ法縁の慈悲何に況んや眞如平等の中に於ては。自心と佛と衆生とは本來平等にして。自身他身の差別を見るは。眞理に通せざるの迷見なり若し能く此の三平等の眞理に躰達する時は。大悲の心は任運に法界に徧滿して。一境土一衆生として我大悲の至らざる所あるべけんや

無縁の慈悲

此三縁の慈悲心あれば。他身の困窮は。全く自身の困窮に同じ他人の快樂は。直に我身の快樂に等し。不惡口戒。こゝに至て滿足すべし。十善戒。こゝに至て究竟すべし十善業道經に。不惡口戒の八功德を說き給へり。曰く一に言度に乖かぬ。二に言皆利益す。三に言必ず理に契ふ。四に言詞美妙なり。五に言承領す。六に言べば即ち信用せらる。七に言議るべきなし。八に言悉く愛樂せらると。以上八種の功德は實に不惡口戒を持つの結果にして又此八種の功德より。更に生ずる所の好果報は誠に無量無邊ありとす今和讃の二句は。これ等種々の妙功德を該攝して。本戒を讃嘆し奉るなり

昔佛在世の時。波斯匿王に未利夫人と云ふあり。一女を產めり。金剛と名く。面貌極めて醜く。身躰麤澁にして。猶蛇の如し頭の髮。麤强して。猶馬の尾の如し。王見て喜びず。勅して深宮に閉ぢて。外に出さしめず年漸く長大にして。當に嫁娶すべきに及ぶ。王便ち一臣を遣はして人の本を豪族にして。今貧乏なるものを索めしむ。臣勅を受けて速に之を覓めて王に

申す。王之を屏處に延て。私に語て曰く。我に一女あり面貌極めて醜なり。卿納れて婦となさば當に相供給する所あるべしと。貧人跪て王に白す。假令太王我に狗を賜ふも亦敢て違せぢ。豈に況や王の女にして。未利皇后の生む所なるをやと云て速に命を受く。王即ち爲に舍宅を造る。門戸七重あり。復勅して外出を許さぢ。尋で彼人を拜して大臣と爲す。或時諸大臣宴會を開く。各夫人を携ふ。唯此大臣のみ獨り將ねぢ。衆人疑ひ怪しむ。彼夫人は或は能く端正。或は極めて醜婦ならんと。竊に五人を遣はして。之を伺はしむ

彼夫人深宮に幽閉せられて。常に日月を觀ぢ。內に自ら剋責し懊惱して言く。妾前世何の罪に依てか此苦痛を受くと。身を宛轉して涕泣す。便ち淚を拂ひ手を清め。至心に遙に。釋迦

世尊を禮し奉りて。新願すらく。願くは世尊。慈悲を垂れ給ひて妾が前に來降して。妾が苦厄を救はせ給へと佛其意を知ろしめして。即ち女の前の地中より涌出し給ふ。紺髮の相現ぢ。夫人頭を擧て。佛の髮相を見奉りて。敬心歡喜するに尋で自身の髮自然に變じて紺青色の如し。佛漸く面を現し玉ふ夫人心倍す喜んで面亦端正に變じて。惡相麤皮自然に滅す佛悉く身を現じ玉ふに。更に歡喜し踊躍して。自ら身を觀るに。猶天女の如し。驚き喜びて。夢にあらぢや。現にあらぢやと或は立ち。或は座し喜び勇むの情は。實に言語に陳ぶべからぢ。世尊即ち爲に。種々の法要を說き玉ふに。須陀恒（預流果と譯す我身を斷じた果の初の一果なり）を得たり。時に佛去り玉ひて後彼の五人の者入る位にして羅漢の四て之を見れば。端正無比にして天女に異ならぢ。暫くして夫

の大臣家に還り。端正の婦人を見て。問て曰。汝はこれ何人ぞや婦答て曰く。妾は君の婦なりと。夫怪しみ問て曰く。汝前には極めて醜なりき。何に縁てか。今日此の如く甚だ端正なりや婦即ち具に前の因縁を語る。是に於て夫大に喜び忽ち使を馳せて。王に此由を奏す王直に至りて。婦の端厳美麗なること。天女の如きを見て。歡喜限なし即ち諸人を將ゐて。佛所に詣り。佛足を禮し白して言く不審かし世尊此女は前世に何の福によりて頓に端正なることを得たるや。願くは世尊爲に開示し玉へ

佛告て言玉はく。過去無量劫に波羅奈國に一の長者あり日に常に一の辟支佛を供養せり其辟支佛身体醜陋なりき。時に長者に一の娘あり辟支佛を見て。悪心を以て罵て曰く。面

貌醜陋にして。皮膚粗悪なり。何ぞ憎むべきの甚しきやと。時に辟支佛。涅槃に入りたもうと欲し。便ち神力を現じて。十八変化を作す。娘見已りて身毛竪立して。深く自ら心を責め。悔を懷いたり。娘女過去に悪口を以て辟支佛を罵るを以て生々に身を受るごとに。常に醜陋なり。懺悔の福に縁るが故に今端正を得たり。供養を以ての故に所生の處。常に豪尊富貴なり。云云蓋し。因果の理の誣ふべからざること。谷に向て。聲を發して。其響応ずるが得べからざるが如し。亦得べからざるが如し。たび造り善悪の諸業は。決して滅に歸はべからず。亦他人の之に代て。受くべきものにあらざるなり。左れば尤怖るべきは。此悪業の罪業。生々世々。厭業おきの醜陋の形を招く者の

なり。生々に常に。人に憎み嫌はるゝことを限りなし。誰か慎まざるべけんや。能く此戒を護持する時は。現に上に出す所の八種の功德を成就し。妻子眷屬悉く相和合悅樂して。上君王の寵遇を得。下衆人の信用を得て。生々の處に於て。形貌端正。動止美麗なるの別報を得て。當來成佛の時に於て。如來の慈悲柔軟語を成就す等。皆此戒の功德なりと言へり。願むべし喜ぶべし

君臣和穆建はぬは　不兩舌語の功德なり

親好厚く和敬せば　是ぞ菩薩の意ろなる

兩舌とは離間語ともいふて。人の仲を惡くせしむるの語なり。これ最も卑劣の所爲にして。君子菩薩たるものは堅く之を禁ぶ護りて。當に勉めて和敬の語をなし。不兩舌戒に隨順すべきなり。凡そ本戒に就て。止善と行善との二種の別あり。諸聖宜しく。止善を護持して。緊密にして缺漏なく。行善を慎行して。精進ならんことを希望す。其止善とは。有部廣律に

昔險林の中に。懷妊せる母獅子あり。凡そ獅子は產日に至らんとする時に。先づ多く肉を取り集めて後。兒を生む。彼母獅子。肉を求めんが爲に。牛群の處に往き。跳ひ逐て行く。時に悖牛あり。新に子を生む、子を護るが爲に。後より行く。彼の獅子即ち悖牛を殺して。幸て險林の中に。澤れり。犢子乳を貪ぼるが爲の故に。死せる母に隨て。共に險林の處に到る。獅子見て念へらく。我若し兒を生まば。此犢子を乳養して朋友となして。共に遊ばしめんと。後久からずして兒を產めり。獅子の兒も牛の子と。俱に漸く長大せり。後母獅子病て。命終に臨み。

両兒を喚て之に告げ曰く。汝等二子我が一乳の資くる所我意に於て差別なし。義兄弟を成す。須らく知るべし。我が殁後宜しく相好し相看るべし。人間なは両舌語を以て父子相背き。兄弟離散す。背面の言復採り聽くべからず。宜しく和好して。母が言を遺るべ勿れと如是遺言を畢て。日に漸く長大せり。其牛は獅子より二児。種々の肉を取て。豐草情に隨て之を厭ふ。形貌肥壯。時に老の外によるが故に。豐草情に隨て殘食を覓む。獅子に隨て殘食を覓む。獅子は牛に向ひて相殺さし歯を垂て名

ひ曰く。我れ腹に入ん。共に厭ふ。我れ當に離間の事を作し。獅子の去るを待て。牛の邊に向ひて相殺さし歯を垂て名皆俱に腹に入ん。我れ當に離間の事を作し。獅子の去るを待て。牛の邊に向ひて相殺さし歯を垂て名めんと。時に野干獅子の去るを待て。牛の邊に向ひて相殺さし歯を垂て名れて住せり。印度の國法慈悲して老者を喚て勇とし。少者を名

けて外甥とす。牛。野干の年老たるを見て。喚て言く。阿舅豈に熱風身を吹く。困極して耳を垂る、やと。野干報して曰く。外甥何ぞ獨り熱風。我が身体を吹くのみならん。更に消息の火焔に同しきことあり。牛報して曰く。消息は云何ぞや。野干答て曰く。我れ聞く。獅子かやうの語を作す。此肉聚の牛。能く何れの處にか向はん。我肉なき時は。便ち之を殺して口腹に充てんと。牛曰く。阿舅此語を作すこと勿れ。我が母。終る時。俱に我等に告て曰く。汝等二子は我が一乳の資くる所。我意差別なし。汝等は義兄弟とす。當に宜しく和敬して相害することを勿れと。野干報して曰く。外甥汝を看るに。死日幾くもなし。我が言利益あり。而も聽かざ。牛曰く。阿舅何の姿を以てか我を殺して。諸を知る。野干答て曰く。嫌堀此獅子獅子。獅子出る

時。身体を奮迅して三聲咩吼し。四に顧みて望む是の如くして汝が前に至らん。即ち知る。此時方に汝を殺さん是語を作し已て牛の處より去て。又獅子の邊に到て。耳を垂れて住す獅子見て問て曰く。阿舅豈に熱風体に觸れ。困極して耳を垂るや。野干報じて曰く。外甥何ぞ但熱風。我身に逼まるのみならん乎。更に悪言の火焔に同しきなり。獅子曰く。消息如何。野干答て曰く。外甥我れ聞く。牛かやうの語を作す。此噉草の獅子能く何の處に向はん。此母、昔時我が實母を狂殺せり。我れ必定して其腹を破らんと。獅子報じて曰く。阿舅此語を作すこと勿れ。我が母終る時。俱に我等に告て曰く。汝等二子は我が一乳の資くる所。汝等は義兄弟とす。須らく知るべし。世間離間の徒充滿せり。我れ後宜しく能く和して相害することと勿れと。野干報じて曰く。外甥汝を見るに死日幾くもなし。我れ利益を陳ぶれども。而も聽かれず。獅子曰く。阿舅何の相を以て。我を殺すを知る乎。野干答て曰く。外甥此牛窟より出る時。身体を動揺し聲を出して吼叫し。脚を以て地を爬き了て。汝が前に至らん。即ち知る此時方に汝を殺さんと。是語を作し已て。此處を捨て去る牛と獅子と窟を出る時。常にこの事を作す。而も未だ曾て過なさず。後獅子窟を出る時。脉を奮迅して。三聲咩吼し四もに顧て望み。牛の前に向へり。牛は亦窟を出るに身脉を動搖して。聲を出し吼叫して脚を以て地を爬き了て。獅子の前に向へり。これ常に爲す所にして。曾て意に存せざりしが。其内心に離間の想あるを詐て。象は獅子の象を現じて來るを

現ぜ。使勢隱べ難し。時に我を殺さ尾ぜ、鉄繫を壞らん惡。獅子即ち爪を以て彼牛の項を搭う。牛使ち角を以て獅子の腹を決く。須臾の間に。二獸俱に死殁せり。時に諸天あり。虛空の中に於て。伽陀を說いて曰く。

若聽惡人ノ言ヲ　必無賢善ノ事ニ　獅子曰フ相愛ト　野干各ニ鬪死ス

その時に譯迦如來。諸の弟子に告げて言ひたまく。汝諸の弟子。この畜生。其兩舌の言を採聽して。母の遺言を憶はざるに由て。遂に相殺ずに至る。佛ぞ況や人に於て。離間語を作さんや。是故に汝等。應に他に於て離間の事を作すべからざる。誡勅し給へり。嗚呼惡むべきは兩舌語なり。小にしては一身を喪ぼし大にしては國家を亡ぼす。この因緣豈但畜生の事ならん乎。此兩舌の世界を破壞すべきと。實に尠少なりぞ。これを懼れ愼みて。犯さるゝを。不兩舌正善の相とす

次に行善の相とは。佛の言はく。過去久遠に二の國王あり一は迦尸國王。二は比提醯王なり。比提醯王に大香象あり。香象の力を以て。迦尸王の軍を摧伏せり。迦尸王是念を作して言く。我今年何してか當に香象を得て。比提醯王が軍を摧伏せんと。時に人あり言く。我れ山中に一の白光象あるを見ると。王聞て便ち募て言く。誰か能く香象を得ん。我れ當に重く賞すべしと。人あり勅を奉じ軍衆を率ひて山に入る。彼象思惟すらく。若し我遠く去らば。父母盲ひて。且つ老たり。如かぞ父母の爲に。調順にして王所に到らんにはと。その時に衆人便ち香象を將ゐて王に奉る。王大に歡喜して。爲に好屋を作り。諸の妓女と共に琴を彈じて之を樂しむ。象に飲食を與ふ

れども。背て之を食はず。象を守る人。來て之を王に白す王自ら往て見る。(上古は畜生能く人語を爲す)。王象に問て曰く汝何故に食はざる。象答て曰く。我れ父母あり。年老眼盲ひて水草を與ふるものなし。父母食はさるに。我れ何ぞ食はん。我れ去らんと欲すれば。王の諸の軍勢能く我を遮るものなし我れ唯父母の盲ひて。且の老たるを以て。王に順じて來れるのみ。王今我を聽して。去て父母を供養して。其年壽を終へしめ玉はゝ。自ら當に還り來るべし。王聞て大に歡喜して曰く我等は便ち人頭の象なり。此象は乃ち是れ象頭の人なりと即ち國内に宣令して。若し父母に孝養せざる者には當に大罪を與ふべしと。尋で即ち象を放ちて。父母の所に還へす父母喪亡して。復王所に還り來る。王甚だ喜て即時に莊嚴して

彼國を伐たんと欲す。象時に王に語て曰く。鬪諍を興すこと勿れ。凡そ鬪諍の法は傷害する所多し。王言く彼れ我れを欺淺す。象曰く。我をして往かしめ。彼をして敢て欺侮せさらしめんと。即ち彼國に往く比提醯王。香象の來るを聞て。自ら出て之に語て曰く。汝我國に住せよ。象の言く住するを得ざる我れ生れてより以來。言を違へず。先に彼王に語て。其國に還るべきことを約せり。汝二の國王應に怨惡を除て。自ら其國を安んせば。豈快からさらん乎と。即ち偈を說て曰く

得勝增長怨　負則益憂苦
不諍勝負者　其樂最第一

その時に此象この偈を說き已て。即ち迦尸國に還る。これより以後二國相和好せり。佛諸の弟子に語て曰く。爾時の迦尸國王は。今の波斯匿王是なり。比提醯王は今の阿闍世王是

なり。爾時の白象は我身是なり云々。世人此般の事を以て還て怪誕綺語の思を作すは。深く三世因果應報の眞理を信せす。佛陀の化身菩薩の來生あるを知らざるなり故に濫りに佛説を誹謗して妄誕とするは心眼に盲ひたるなり。諸佛は常に普現色身三昧に住して。普く十方世界に於て。衆生を教化引導して。而不和合等の事ある時は。速に之を和善して。利益安樂を施し給ふ。是則無我の大我を以て一切衆生を利益し無慾の大慈を以て三界の家とし。群生を子とし大慈大悲の梵音物として利剤せざるなく處として救護せざるなし是を普現色身三昧と名け。和光同塵の利物の幼兒行菩薩遊戯三昧と云ふ。庶幾くは佛陀の法を信するの徒。此諸佛應現不思議の化益を信して胸臆に任せて。眞理を妄斷して。怪誕

戯劇となし。謗法の罪咎を招くこと勿れ。されば平等無我の眞理は。これ此不両舌の眞の戒體なり。

足ることを知る人の身は居ところ直に華臺なり。

己をせめて施せよ　多欲は餓鬼の種因なり。

十善の中上來身三と口四との七支の善を。略解し畢れり。これより意業の三善を明すべし。一切万善の中に於て意業を最も大切とす。一切萬悪の中に於ても亦意業を最も懼るべしとす。何となれば一切善悪の諸業。唯一心を本とす。手を擧るも足を下すも皆是れ一心の所作なり。一心眞理に順じて善に趣く時は。身口隨て善ならざるなし。一心正理に背て悪に向ふ時は。身口隨て悪ならざるを得ざればなり。是に由て之を觀れば。身に殺盗婬を行じ。口に妄語綺語し悪口両舌する

も。只是れ一心の迷ひよりして犯せざるはなし。若し意に貪瞋痴を離るゝ時は。一切の悪は防がざるに自ら息み一切の善は期せずして自ら備はらんと。火の虚空に興り水の卑きに就くが如くなるべし。左れば意業の三善は尤も謹慎護念せべき。一切道徳の根原なり。これより不貪欲の功徳を述べて和讃の深意を略解すべし

三界の慈父大聖世尊。末世の吾等が爲に遺勅を垂れて曰給はく。汝等若し諸の苦悩を脱せんと欲せば當に知足（足ることを知るは即ち不慳貪戒なり）を觀ぜべし。知足の法は即ち是れ富楽安穏の處なり。知足の人は地上に臥すと雖も猶安楽なりとす。不知足（ある）が上に尚多きを貪ぼりて際限なきを不知足といふ）の者は天堂（帝釋天等には自然の天衣あり自然甘露の食物あり）に處すと雖も亦意に稱はず。不知足の者は富むと雖も貧し（心常に不足にして食苦止む時なし）知足の人は貧

しと雖も富めり。（心常に饒にして缺乏なれば富貴の人に勝る）云々是れ正に不慳貪戒の眞相を說き顯し。畫き出し給ふものにして。今の和讃の意旨誠に斯に在るなり。世人多くこの不慳貪の安楽にして且つ尊むべきことを知らずして。還て慳貪を以て誇れる者あり。迷倒誤謬も亦甚しと謂ふべし。人足ることを知らざれば假令富萬金を累ね。位万乘の君たるも亦決して足れりとすることは能はず。足ることを知らざれば萬金も却て身を苦しむの枷鎖となる。是れ經に不知足の者は富むと雖も貧し。と說き給へる所以なり。設し足ることを知て此不慳貪戒を持つものは。假令身には繿縷の醜き弊衣を纏ひ。口に馬麥を食するも亦以て樂とせゞ。故に孔子は蔬食を食ひ水を飲み肱をまげて。枕とす。然其中にあり。と陳られたるも。能く此の不慳貪戒

の眞相を自得せられたるなり。左れば終に足ることを知るものは貧しと雖富めりと說き示し給へるなり。苟且にも道徳に志す者は。深く三世因果の眞理を信ぜて。自身の吉凶禍福は皆是れ己が前世に作せる善惡業の源因。今日目前に結果を顯し來りたるものなりと知りて。貧困に處して前世慳貪にして。施を行せざりし惡業の報なることを悔い。勉めて旋行慈善の志を勵まし。他の善根功德を讃嘆して。十善業道を隨順奉行すべし。世には慳貪を以て貧賤なる者の持前にして。施善を作す能はざるものと思へる者あり。是れ大なる迷見なり。優婆塞戒經に假令貧賤なるも一撮の麥麨牛粒の米穀を施す能はざるもの、あるべからず。此少許の物も蟻子細蟲に施せば彼飽滿することを得と說き給へり。故に貧なるものは其前世の慳貪の罪業を懺悔して。力に隨てそれ相應の施善をなすべし。若し力及ばざる時は他人の施を行ふを見て隨喜し佐助して其志を讃嘆すれば。其功德廣大にして施の功德に等しと說き給へり。又富貴なる者は過去に於て本戒を護持せし功德の發現ぜ來りたるものなることを知て。益ます〳〵喜び勇みて廣く困乏のものを憐み救濟して。彌よ〳〵本戒を遵奉して未來生々世々の福報の妙因を種植すべし。決して高慢を以て。他の貧困のものを侮り輕しして己が福業の功德を損害すべからず。今日の富貴は決しておのれ自然に富貴なるにあらず。必ず前世の父母師兄善友の教に由り。一切衆生の恩賴に依らざるはなゑ惟ふに過去善因の功德に依れはこそ。今日福報の境界を發現し來れるも

のなれど。是の如く心を因果の道理に安住して。高きも卑きも皆是れ過去世原因の顯れし所の影像にして。決して。自然に來れるものにあらぜ。又他の造物主等の作す所にあらざることを信じて造次にも因果の眞理を忘るゝことなく。足ることを知て徒らに苦慮することなれば其人の皮相は設ひ卑賤なるも心中既に蓮華世界を構造する者と云ふべし。昔佛在世の時。羅閦城に長者あり跋提と名く。饒財多寶稱て計ふべからぜと雖。慳貪にして布施を行ふを肯んぜぜ。彼の長者七重の門あり皆守門の人ありて乞者をして門に入らしめぜ。爾時に長者晨旦に餅を食せり。是時に世尊の弟子阿那律尊者此長者を濟度せんが爲に。神通を以て長者の舍中に入りて鉢を舒て長者に向へり。長者極て愁憂しながら則ち少計の餅を施與す、阿那律餅を得已て住處に還れり、長者便ち大に怒り守門の人に語て曰く、我制して人を門に入らざらしむ、何が故に我命を背くやと守門の人曰く門戸牢固なり、この道人何の處より來れることを知らぜと長者怏々として次に美羹を食せぜ大迦葉尊者また地より涌出して、鉢を舒べて長者に向へり、長者甚だ愁憂しながら即ち少計を與ふ、尊者還給ひて長者ます〳〵瞋恚を起して、守門の人を責む、又曰く此禿頭沙門幻術を善して世人を誑惑す、正行あることなしと、時に長者の婦長者に、語て曰く大人此に比丘を知り給ふや否や第一の比丘は是れ斛飯王の子にして阿那律と名。梵行を修し阿羅漢道を得て天眼第一なり、第二の比丘は此羅閦城内の大梵志なり、迦毘羅と名く出

家して阿羅漢道を得、頭陀第一なり大人當に口を護て是語を作すこと勿れと、時に目連尊者衣を着け鉢を持して虚空に飛騰し長者の爲に偈を説て曰く

如來説二二ノ施一　法施及財施　今當説法施一　專レ心一レ意聽

是時に長者當に法施を説くことを聞て歡喜を懷き目連に語て曰く願くは演説したまへ當に之を聞くべしと、目連報して曰く如來五事の大施を説き給へり不殺生と不偸盗と不邪婬と不妄語と不飲酒となり、汝盡形壽之を修行せんや否や、長者答て曰く今説き玉ふ所の如きは乃ち寶物を用ひ也、我悉く奉行せんと則ち目連に齋食を供養し尋で一端の氈を供養せんと欲して、藏に入て其好からざるものを選む に悉く好物を得。更に取れば還て好し時に目連長者の心を知て此偈を説て曰く

施ト與レ心ハ鬪諍ス　此福ハ賢ノ所レ棄ル　施ノ時ハ非ニ鬪ノ時一　可レ時ニ隨テ心ニ施一

長者愧ぢて便ち白氈を持して之を奉る目連即ち呪願して長者の爲に慳貪の懼れ避くべきこと。布施の尊ひ行ふへきことを説き給ふを聞て。長者心開けて法眼淨を得たりと。云々嗚呼跋題長者豈昔に求めんや。各自ら省みて。この所行に倣ふこと勿れ貪欲は實に功德を劫むるの大賊なり貪欲ある者は日月を觀ても貪欲を起し山川を觀ても貪欲を起し男女を觀ても貪欲を起し衣服を觀ても貪欲を起し。眼に觀るもの耳に聞くもの一切の境界貪欲ならざるなし。嗚呼何ぞ苦の甚しきや謂ゆる天堂に處するも常に貪欲の爲に責られ寸時も心安きことなし。況や原因結果の感招する所一

期命盡の後は必彼餓鬼世界の苦相顯現すること目連尊者の母の因緣の如し。凡そ餓鬼界は三類九種の別あり。三類とは無財。少財。多財なり。無財餓鬼に又三種あり一に炬口鬼とは口より恒に火炬を出し食すること能はざるなり。二に針咽鬼とは咽喉の穴の少きと針を通す計の如くにして腹の大なること山の如し故に常に水食に飽くこと能はざれば。饑火腹中に燒んにして熱苦に堪へざるなり。三に臭口鬼とは口中に腐臭の氣ありて苦に堪へざるなり。少財多財に亦各三種の不同あり。其苦報稍輕しと雖も。人間の饑渴の苦に望ひれば。千万倍にして比類すべからぜ。これ皆此慳貪業の招く所の惡報なり。誰か之を懼れざるべけん乎之に反して今此不慳貪戒に隨順する者は一麻一米も吾身を保つに

足る。見聞覺知の境遇一として少欲知足不慳貪戒ならざるはなく。當來必ぜ天堂に生して衣食自然にして常に意の如くならざることなし。嗚呼亦愉快ならぜや。庶幾くは諸賢世尊最後の遺勅を信受奉行して。漸次に本戒の實相に通達し未來作佛の勝因緣を種植し給はんをこと

世を亂し身を亡すも　皆一朝のいかりなり
一切男女は過去の父母　一子の慈悲を運ぶべし

蓋し。自己の意に合へる境界に對しては。貪欲を起し。已身の意に逆へる境界に向ひては。瞋恚を起すは。我等凡夫の常とする所にして強ちに其罪惡の。罪惡たるを知らざるものゝ如しと雖。これ顚倒の所爲にして。眞理の許さゝる所。佛天神聖の呵責し玉ふ所なり。我等衆生無始却より以來。三界の苦

海に沈淪して。常に生老病死の爲に逼迫せらるゝ所以のものは職として。此貪瞋二種の。所爲に由らざるはなし。此貪瞋の煩惱は。諸の愚痴邪見の煩惱に由る。愚痴邪見の煩惱は何に由て起るとならば。法性の眞理を知らざるに由る。法性の眞理は、何かなる形相なるかと謂ふは。所謂一切萬物の本性は無我無自性にして。衆〳〵の因緣假和合により。成立するものにして。一法として。自然獨立なるものあることなし。然るを我等此無我無性の萬物に向て。我有我名の固執を成し。爲めに我見我慢の煩惱を發生す。此我見の煩惱に纏縛せらるゝが爲に已が我見に隨順するものに於ては。善惡正否を擇ばゞ。悉く貪愛を起し。此我見に違背するものに於では。善惡理非を問はゞ、瞋害不忍の心を生ず。されは此貪瞋の惡惱を發現するの原因は。法性無我因果應報の眞理を。識知せざるに起因せゞんばあらざるなり。故に一切の不義を避け。道德の本源に還らんと欲するものは。必ず先づ。其本源の眞理を明了識知せざるべからず。若し其本源の眞理に明なるときは自ら愚痴邪見を離る、邪見を離るゝときは。自ら非理の貪瞋を起さず。非理の瞋を離るゝときは。自ら順理の瞋を離れて泰然柔順の德を成就すべし。何をか順理の瞋。違理の瞋と云ふ。曰く他慈心を以て來るに。己怨を以て對ふ。是れ違理の瞋なり。他非理非道を以て來るに。己瞋を以てするを。順理の瞋と云ふ。此順理と違理と二種の瞋。大に別なるものに似たりと雖も。其忍辱慈悲の德義を破るや一なり。何となれば。凡そ佛敎の大意は。一切善惡逆順の事。原因結果の天則に。由らざ

るものなしとす。若し此天則に依りて。判決するときは。不孝の子。不貞の妻不義の悪友に遭遇するも。孝子貞婦信友知識に値遇するも。一切の苦樂。悉く自業自得にして。他作自得の理あることなしとす。謂もる不孝の子、悪友に。値遇するも。己が過去世に於て。他に對して。不孝不忠不貞不信を作せし結果の今日此幻身の上に。浮ひ顯るゝと。猶鏡像の好醜の形質に由りて顯現して。決して形直くして。影曲れること無きがごとし。若し能く此因果の眞理に住するものは。順理違理二種の境遇に於て。決して區別を執せざるなり。故に此理に住するものは。違順二種の眞を起さゝるのみならず、一切の貪欲に於ても亦能く撲滅することを得べきなり。之に由て是を見れば。今この不瞋恚戒は。道德慈善の最も緊要とする所

なれば。眞の道德者たるものは。必ずや此戒を全ふせざるべからざるなり。若し此戒を全ふせざるものは。決して眞實の道德慈善の人とは稱すべからざるなり。若し瞋恚を縱にする時は。即ち自ら道を妨げ。一切の善事一切の快樂を失して己心に樂しきことなく諸人の嫌惡する所となる。其懼るべきこと毒蛇惡獸猛火よりも甚しとす。故に華嚴經には。瞋恚の火は。能く諸の切德の林を燒盡すと說けり。世に一旦の瞋に其身を亡し。以て其親に及ぼすと誡められたり。故に「世を亂し。身を亡すも皆一朝の怒なり」と云へるなり。苦し瞋恚を起して。常に諍鬪を好む者は。世界到る所として。自身の敵ならざるはなく。死して後修羅道に墮して。鬪諍の瞋火。息む時なし。假令百年の善行も、一念の瞋火の爲に滅すること。百年

の間に積し薪を。一朝火に燒くが如し豈懼れざるべけん乎人能く瞋恚の懼るべきことを領知して此戒を奉行する時は。一切の善事一切の快樂は。自ら備り。父母妻子和悅して。奴婢に至るまで。その恩惠に懷きて主人の爲に身を顧みざるに至るべし。家内既に是の如くなる時は。天下到る處として父母兄弟ならざるなく。生々世々諸人に敬愛せられて常に不足なからん。豈愉快も復愉快ならずや。これ實に此戒より生ずる所の功德にして。諸佛菩薩の笑を含み隨喜し給ふ所なり。故に此戒を持ものは。常に慈心を行して。妻子眷屬の者ば勿論。鷄犬に至るまで。常に慈心を以て之を養ひ。決して一念の瞋恚をも起すことなかるべし瞋恚を起すの結果は。唯自損他損のみ。宜しく勤めて謹愼護持して。修羅の因業を造

ることなれ

昔し一の家ありて。嫁と姑と常に相和せざるあり。或日南風烈しき時。その婦飯を炊く。偶姑非理に呵責す。時に婦亦甚だ瞋忿すれども姑に對して爭ふことなし。能はず。遂に傍らなる羊に向て。此畜生めと云ひて。燃燼を以て之を打ちしに。其燼の火。羊の毛に燃つきて。羊は泣き叫ひ走り。後ろなる草舍に入り。藁芥の中にその火を摺り。滅さんとせり。故に藁に燃附きたる火熾に。加之風烈しくして。終に大火災となり。數萬の家屋を燒亡して。延て王の象舍に及べり。象狂奔して。草舍を踏摧推倒して。遁れ出て。隣國に奔り往て。民家及ひ田畠を害ふこと。夥多なり。人民之を官に訟べ遂に兩國の戰爭となり。十數年の間。戰爭に多くの衆生を損害せりと。看よ一念の

噴火が。兩國の戰となる。生々世々の過患となる。初め一念の瞋恚は。纔なるに似たれども。遂に國家の大事に及べり。實に恐るべきの至なり。故に經には。刹那に造れる罪。無間に墮すと誡め給へり。抑も是の如く。瞋恚を生ずるものは。是れ他なし。未だ上に演べし所の。三世因果善惡應報の眞理を知らざるの致す所なり。是に由て。梵網經には。一切の男子は。是れ我父。一切の女人は。是れ我母なり。我生々に。之に從て生を受けぜと云ふことなし。故に六道の衆生は。皆これ我父母なりと觀誠說示し給へり。此文は實に吾等衆生の。造次顚沛にも忘るべからざるの龜鑑なり。若し此文を信じて疑はさる時は。豈十惡の行業を爲すに恐んや。誠に惟れば。一切衆生は。無始より此來。三界六道に輪轉して。親となり子となり。夫となり婦となりて。其關すなる所。實に廣大なるとす。故に今日我が嗣ふ所の。牛馬鷄犬も。是れ我前世の父母なるべく。亦彼れが妻子奴僕なりしことありしは。必然の眞理なり。若し能く深くこの眞理を領會して。日夜面前に對する。貴賤男女は。皆是れ已が生々世々の父母なることを知て。勉て慈心を行じ。自ら十善道を行ひ。又他をして十善道に隨順せしむべきなり。是の如く我が過去の父母師兄に對すその觀念を忘れざれば。誤ても自他を損害するの大瞋大害は。起らざるべし。是れ豈生々世々大忠大孝ならざるや

八正の道廣けれど　邪見の人ぞ踏み迷ふ
已が顏貌智惠伎倆　皆善惡の影ぞかし

これは第十不邪見戒を讃嘆し奉るなり。凡そ惡業多しと雖

む。是を攝せば。十惡を出でゝ十惡なき。貪瞋痴に攝す。貪瞋痴の起ることは。何の故ぞとならば。唯この第十正智不邪見戒の因果應報の眞理の塞がりて明了ならざるの致す所なり。既に愚痴邪見にして。因果の理に明らかならざるを以て。貪瞋猥りに起ることあり。若し精神に確乎不拔に信ずる所あれば。假令人ありて。惡を作せば天功德あり。善を爲せば天禍祟あり。決して心を動かさゝるべし。若しありと。懇誘するものあるも。一定の見なきものは。逆順の緣境に羈れて。必ず貪瞋恚の煩惱の起るに任せず制御する所なからん。されば此十善戒の中。餘の九種の不善業を發起することは。一に此正智不邪見戒の。有無に依るものにして最も謹愼すべきは。第十不邪見戒にあるなり。和讀に八。正。道とは此八法偏邪を離

る、故に正といふ。能く涅槃に通ずるが故に道といふ。一は正見。深く四諦無漏四諦とは一苦諦二集諦三滅諦四道諦なり の因果の眞理を信じて能く外道斷常有無の邪見を離るゝが故に。正見といふ。二に正思。惟。四諦の眞理に安住して明了に思惟籌量するをいふ。三に正語とは。無漏の智惠能く口業を攝して。一切虛妄不實の語を離るゝを云ふ。曰く妄語と綺語と惡口と兩舌を離るゝなり。四に正業とは殺生偷盗邪婬を離れて。清淨の正業に安住す。正業とは。戒定惠等の正業也。五に正命とは五邪命を離るゝなり。曰く一は。利養の爲に詐て異相奇特を現ず。二は利養の爲に自ら功德を說く。三は利養の爲に吉凶を占相し。人の爲に說法す。四は利養の爲に高聲に威を現じて人をして畏敬せしむ。五は利養の爲に所得の供養を說て以て人の心を

動かす。以上の五種は邪の因縁を以て。活命を計るが故に邪命と名く。正命とは。佛の戒律に準して。如法に活命するなり六に正精進。能く精進勉強して。斷悪修善に堪ふるなり。七に正念とは戒定惠の正道。及び不淨觀數息念等の。助道の法を思念して。涅槃を求るなり。八に正定とは。心を一境に住して諸〳〵の散亂を防ぎ。身心寂靜にして眞空の理に住して。決定して移らざるなり。以上の八種は。我等佛弟子たるもの、所行に去て。斷悪修善の要道。轉迷開悟の方針。而も一切万善を攝し收めて。漏さいるなり。然るに今邪見の人は此八種の正道に迷ひて。生死の牢獄出るに期なく。冥きより冥きに入りて三途八難の悪道に踏み迷ふの有さま洵とに憐れむべきの至極なり。次の二句は。正して不邪見戒因果の相を示せり。邪

見とは我見に任せて佛神を蔑にし因果を撥無する等種々ののよこしまの見識を立つるなり。故に其種類甚多しと雖も要を取て云へは。斷見と常見となり。斷見にも色々あれども先づ善を作して好報なく。悪を作して悪の報なく。神といひ佛と云ふも今現に見るべきならねば之も無き事と思ひ定むるを斷見と云ふ。常見も種々あれども。且く人は常に人となり。畜は常に畜となりて。人の畜生となるべき理なく。畜生蟲蟻の類が。人となるべき理なしと。思ひ定むるを常見といふ。是等は皆。今此世界は。衆生の善悪の業因に依て。萬殷を顯現するの理を知らざるが故なり。不邪見戒は。至極甚深のことなれども。且く一言にして說かば。佛菩薩羅漢も世にまします。神仙聖者もあるべく。眼にこそ見ねね。天鬼神祇も有る

べく。善因には必ず決定して善報あるべく。惡因には必定して惡報あるべし。原因結果の道理は自然の制裁にして。欺くべからざるものとせば。善因に惡果あり。惡を行じて善果を結するの理は万々あるべからず、智度論には。一切世間法唯因果無人と說きて。因果の外に我人衆生なきことを明說せられ楞嚴には。十界は循業發現なりと。斷定せられたり。世間一切の事物は皆善惡業因の影象の現はるゝものなれば。古今文野を問はず貴賤貧福男女好醜千人千人。萬人萬人各々に皆其分限を異にして。假令父子兄弟夫婦の間と雖も一種類として。其福力德行智能を同じうするものあるなきは世人の能く知る所なるに非ずや。萬物の出生する皆原因あり。人の靈たる。何ぞ原因なきの理あらん乎。是れ他に故あるに非ず。唯吾人各自が。未だ此世界に顯出せざる己前に各々に。其貴となるべく。賤となるべくの原因を造作せしてとあるを以て。今現に此影法師を感得したるものなりと知るべし。豈に只人間の好醜賢愚のみならんや。人も常に人たるに非ず。其惡業に依ては。地獄にも入るべく畜生ともなるべく。畜生もまた常に畜生たるべきにあらず其宿生の善業熟する時は。人間ともなるべく。天道にも生を受べきものなることを。深く信じて疑はざるを。此戒護持の相とす

總じて戒法は。不可思議なるものにて。此戒善が身にあれば外の惡事は自ら遠ざかる。譬ば國家兵力强ければ。敵國が得伺はぬ如く。又人の元氣充實したる時には。風寒暑濕の外邪

が侵さぬ如く。此原因結果の眞理を信じて。疑はざる時は。自ら佛法僧の三寶。出世無漏の淨法に於て。仰慕の志を發現し一切衆生に於て。同躰の慈悲を發生すべし。是を菩薩の發菩提心と云ふ。人若し此無漏清淨にして。他を憐愍するの心。内に成就すれば。是を菩薩の戒躰と名づく。此戒躰能く。廣大無邊の功德を具有す。是を菩薩の十善戒と名づくるなり

十善法語は曰く不殺生戒其身にあれば。假令怨賊毒蟲に遇ひても慈悲生起諸の父を弑し君を弑し。非理に有情を損害する惡賊煩惱はよりつかぬじや。不偷盜戒其身にあれば金銀財寶祿位爵等の中に。非理の求なく。家燒刼盜穿踰私竊などの惡賊煩惱はよりつかぬじや。不邪婬戒其身にあれば他の男女の境に於て。自ら愛着を生ぜぬ。一切不義の惡賊煩惱はよりつかぬじや。不妄語戒其身にあれば。一切言語が自ら眞正になり。一切の欺誑惑亂偽物を造作し。偽書を作り出す等の惡賊煩惱はよりかかぬじや。不綺語戒其身にあれば言語に虛飾なく。一切無用の言語等の惡賊煩惱はよりつかぬじや。不惡口戒其身にあれば。言語自ら柔軟にして諸の罵詈可責惡聲怨言等の惡賊煩惱はよりつかぬじや。不兩舌戒其身にあれば。言語に仁愛の相あらはる。諸の他の親好を破る等の讒言詔諛の惡賊煩惱はよりつかぬじや。不貪欲戒其身にあれば。朝夕寢食到る所に足ることを知る。諸の名聞利養等の惡賊煩惱はよりつかぬ。不瞋恚戒其身にあれば。五尺の姿全く慈悲と相應す。一切の眉を顰め額を蹙むる等の惡賊煩惱はよりつかぬじや。不邪見戒其身にあれば。一切の人

民貴賤男女を見ても。山河大地を見ても。全く因果應報不邪見の相なることを知る一切の邪思惟惡分別を離れて。賢聖を蔑にし神祇を侮り佛菩薩を非毀する等の惡賊煩惱はよりつかぬとや。」今十善の戒相を說分けて。且く十種とすれども。其躰は一にして謂ゆる一切の邪智邪見を離れて。正智見に通達すれば。自ら此十種の惡業の非を離るゝなり。此防非止惡の功能を有する邊に。戒躰の名を立るなり。此防非止惡の功能か任運に增長して。暫くも息まさること。譬へば日月輪の常に運轉して。萬國を照す如く。草木の種子朽敗せざれば。枝葉花菓日夜に增長するが如く。又無邊の境界に對すれば。戒も亦無邊なること。熾盛の火に薪を加ふれば。火勢益盛んなるが如し。此等の事は。唯淨持戒者の。自ら知る所にして餘人の知らざる所なり。詩人ならねば。詩人ならねば。詩の巧拙は知らぬ。歌よみならねば。歌のよしあしは。風景雅致は餘人は知らぬ如く。隱者ならねば。清閑の樂は知らぬ如く。自ら戒法を護持する人に非れば。戒法の尊重なることは知られざるなり。庶幾は本戒護持の諸賢。深く此因果應報の眞理諸法無我の實理に安住して。因果撥無斷善根の衆生となることなかれ。佛法豈他あらんや。因果應報眞理是なり。十善豈他あらんや。此應報眞理の活動力なるのみ

神も聖も御佛も

みな此道に由り玉ふ

これは眞實の道なれば

此進撥無するなかれ

上來十善戒二の和讃を略解し畢れり。以下は總じて。十善戒の功德を結讃し奉るなり。前に既に陳べたるが如く。此十善

は法性自爾の道德にして。人道の基礎。万善の根本なるものにして。下我等衆生が今日作爲する所の。微少の善業を始め聖賢の道德より乃至神明佛陀二利圓滿の妙業も。此十善の外ならざるなり。菩薩の六度萬行も。身口意の三業。純善より發生するの功德ならざるなし。如來十力。四無所畏。十八不共法等の果上の功德も。皆此十善の功德の顯はるゝ所なり。故に知ぬ。此十善は。一切道德の標準にして。吾人人道を履行するの。方針規繩なり。故に苟も。愛國仁民。孝弟。忠信。貞婦。義人たらんものは。須臾も離るべからざるの要道なり。若し此十善の天則に戻る者にして。忠臣孝子たらんものは。決してこれおらざるなり。凡そ人たらん者。此十善を除ては。亦他に標準とすべきものなし。古より死あり。民信なくんば立たぞとは

此十善不邪見戒に住して。疑はざるなり。神道の正直を尊ぶも。此不邪見戒の儀式なり。是の如く神明にまれ。佛陀聖人にまれ。皆此十善を以て規矩準繩とし給はざるはなし。これ法性眞實の理性より。發する所の光用功德なればなり。故に若し此理に戻り。此道を撥無するものは。神隨の道に戻り天理を謬り。因果を破却するものなれば。必ず禍其身に及ぶこと谷響の聲に應じ。鏡像の形に從ふ如く。毫も疑ふべからざるなり。豈一時私心の煩惱の爲に。永劫劇苦の原因を爲すべけんや。深く信知して慎しみ護るべきなり〳〵

妻子珍寶及王位　死出の旅路の伴ならぞ
唯此戒の功德のみ　身に添ふ三世の友ぞかゝ

これは大集經の偈の意を陳べて。十善の功德を讃唱し奉る

なが偈に曰く

妻子珍寶及王位　臨命終時不隨者
唯戒及施不放逸　今世後世爲伴侶

蓋し。一切世間の萬法は皆生滅無常にして。一事一物として常住不反の物あることなし。山も崩れ。河も埋もれ。桑田も變じて海となり。綠髮は變じて白髮となり。遂に死し去て白骨と成る。愛々たる妻子も吾に先だちて黃泉の客となり。親々たる父兄も既に青淤の泥に歸す。誰人か此無常を免るゝものあらん乎。頼もしげなき哉。世は實に無常なり。此身の墓なきこと。朝露電光も啻なら屠所の羊に異ならぬ。然るに此無常の世界に處し。此危晩の身躰を以て徒に名利を爭ひ。我欲を縱まゝにして。未來の懼るべきことを覺らぬ。善根功德の資糧を貯へざるは愚の至りならぬや。一息絶へぬる時に當ては。妻子の親き身は。還て生死の迷執を繫ぐ鎖となり。財寶珍貨の資産は適て冥途の昏衢に。吟よはすの怨讎となる。冥々たる前途。我身に隨ふものは實に一物もなし。此有樣は貴賤男女の隔なく賢愚貧福の別なし。唯現世に於て。造る所の貪瞋嫉妬無量無邊の惡業のみありて。我を引て惡趣に導く。實に此惡業は父兄妻子も代て受くべきにあらぬ。自ら負擔して。獨り冥途に趣かんこと聞くすら身毛竪立計りなり。況や冥々たる黑闇の前路を萬斤の磐石も啻ならざる。無量の惡業を荷負し去ること。重擔豈耐へべけんや。苦毒豈忍ぶべけんや。泣けども涙落ちぬ叫けべども聞くものなし。爰に今吉戒法の功德のみ有て

此黒闇の永夜を照し。此惡業の磐石を摧て。我死出の旅路の伴侶となり。我を善處に導くこと。父母嬰兒を荷負するよりも親しく。妻子珍財の比類すべきにあらぜ。又歡喜朴舞の至ならぜや。此に至れば。百万の資産も。一日不殺生の功德に如かぜ。勳位爵祿も。一毫施行の慈善に如かぜ。眼前の名利は。亦何の用にか立たん本會に入て分に隨て十善業道の功德を思念し修行する諸賢何の歡喜か之に如かん。何の愉快か之に及ばん

百歩の間持つすら佛になるとの給へば

万行中の易行なり唯ひたすらに守るべし

未曾有因緣經に。佛、波斯匿王に告げ給はく。世人心麁なること。譬へば猿猴の如し。諸〳〵の煩惱の風の爲に動轉せらる。是故に十善道を行せんと欲する者は。遲久なるを得ぜ。十善を修せんと欲せば。當に三時と謂ふ。晨より食時に至る名けて上時とす。一食頃を經るを。名づけて中時とす。百歩を行くの間を。名づけて下時とす。王の白さく。世尊の說き給ふが如き。三時を限て。十善行を持つは其功蓋し微なからん。何んぞ福を生せんと。佛王に告げ給はく。人十善を修する時節促まれりと雖も功報いよ〳〵廣し。尙を以ての故に。心道の三戒（不貪不瞋不邪見）守護すること難きが故に。少時と雖も。持てば果報無量なり譬へば人あり。百年の中に於て薪草を積聚して火を以て之を焚くに須臾の間に滅盡するが如し。是故に當に知るべし少時の修善能く無量の惡業重罪を滅す。又火を攫るに。勤加して力を用うれば。須臾の間に火を得。火の功力。能く天下の

草木叢林を燒き傾け盡しせ。乃ち息むが如し。大王當に知るべし。人。十善を修するとも。亦復是の如し。須臾の功。能く無量の惡業重罪を滅し。能く行者をして。菩提の芽を起さしむ萌芽成ずるが故に。漸々に增長して。佛果を成せん云々時に王を始め群臣奴民。後宮夫人等。四十餘人。大に欣慶して。皆無上菩提心を發せり。世人宜しく知るべし。彼松實銀杏は。其實微少なりと雖も。之を種植すれば。雨露の緣熟するを待うて能く。凌雲大樹となるに非ずや。百步間の善業。其功力を費す甚だ少しと雖も。其結果の德。いよ〳〵廣大なり。而して此十善を持つことは別段に舌を動かし。身を轉ぜずとも。泰然として持行せらること。尤も易行の法門なり。切に願ふ諸賢に深く因果の眞理を信じ。篤く十善業道を尊重して。自を利し他を利し。一切衆生と共に。解脫の道に進むべし。又朝暮動行の時は此十善和讃を唱へて。佛法僧眞實の功德を。讃嘆し奉るべし。之を和讃の略解とす（十善和讃の全文は別にあり）

（大尾）

明治二十五年九月　　雲照和尙ノ諾得謹テ拔版ス

本書中誤植ノケ所謹テ左ニ之ヲ正誤ス

正	誤
百八頁九行目	利劑ハ利濟ノ誤
百十一頁初行	富貴ハ富貴ノ誤
百十五頁五行目	食せぞハ食せりノ誤
百二十頁末行	惡惱ハ煩惱ノ誤
百廿三頁九行目	苦しハ若しノ誤
百廿七頁八行目	そのハるのノ誤
仝　頁九行目	らなぞやハならぞやノ誤
百三十七頁初行	詩人ならねばノ六字削ル
百三十七頁十行目	此進ハ此道ノ誤
仝　頁十一行目	二ハ一一ノ誤
百四十一頁三行目	適ハ還ノ誤
百四十四頁五行目	四十ハ四千ノ誤
振假名正誤	
百八頁末行	化益ハやく
百九頁二行目	戒はかい
百十六頁六行目	願はねがは
百十八頁四行目	食はしよく
仝　頁五行目	穴はあな

明治二十五年十月十一日印刷
同年同月十三日出版

大阪市東區道修町五丁目七十七番屋敷寄留
編輯兼發行者　伊達隆辨

大阪市東區平野町四丁目九十一番屋敷
印刷者　喜田甚太郎